

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.190

2009年3月

平野総長 退任にあたって 一名古屋大学総長として在任した5年間を振り返って



目次

●平野総長 退任にあたって	
名古屋大学総長として在任した5年間を振り返って	3
●ニュース	
2008年ノーベル物理学賞受賞記念 名古屋大学レクチャーを開催	6
第3回予防早期医療創成プロジェクトシンポジウムを開催	8
名古屋大学学術憲章を一部改正	9
岐阜銀行、G-VECと産学連携に関する協定を締結	10
平野総長が米国UCLAを訪問 学長と会談、イグナロIAB委員に感謝状を贈呈	10
宮田理事が第2回日中大学学術フォーラムに出席	11
平成21年度名古屋大学入学試験を実施	11
東山地区が名古屋市エコ事業所優秀賞を受賞	12
防災教育チャレンジプラン優秀賞を受賞	12
平成20年度個人情報保護に関する教育研修会を開催	13
平成20年度事務職員の海外研修報告会を開催	13
第21回経営協議会、第10回総長選考会議を開催	14
吉村生命農学研究科教授と勝野高等研究院特任講師が日本学術振興会賞を受賞	14
平野総長らが総合運動場複合棟を視察	14
●知の未来へ	
途上国の教育開発・改革に関する研究	15
北村 友人（大学院国際開発研究科准教授）	
●知の先端	
リボソームを用いたリアルタイム観察から明らかになった	16
第4の細胞骨格セプチンの能力	
滝口 金吾（大学院理学研究科助教）	
●学生の元気	
2008年度名古屋大学学生論文コンテスト「学問のススメ 論文へススメ」	18
●部局ニュース	
国際経済政策研究センター・キタン国際学術シンポジウムを開催	19
ライフトピア老年学セミナー開催	19
複合材工学研究センターの看板上掲式を挙行	20
オランダ・ワッハニンゲン大学、アムステルダム自由大学と	20
学術交流協定を締結、特別セミナーを開催	
農学部がカンボジアにおいて海外実地研修を実施	21
アジア・アフリカ学術基盤形成事業国際セミナーを開催	21
第1回地球生命圏研究機構国際ワークショップを開催	22
ヨーロッパの高等教育改革に関するセミナーを開催	22
第4回地球教室 ナゴヤで化石をさがそう！	23
「愛知の野鳥 環境と多様性」キャンパス探鳥会、ギャラリートークを開催	23
『トリのミクロの不思議—トリの羽やホネを電子顕微鏡でみてみよう—』、	24
特別講演会を開催	
博物館にミニチュアドリームキャリーが寄贈される	24
●定年退職される教授のことば	25
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成21年1月16日～2月15日	33
●イベントカレンダー	36
●名大トピックスの表紙で綴る学生課外活動	38
●ちょっと名大史	
名古屋大学の「創基」138周年	40

名古屋大学総長として在任した 5年間を振り返って

総長
平野
眞一



平成21年3月末日をもって、総長の任を満了し、退任するにあたり、一言ごあいさつを申し上げます。

今から5年前、国立大学の法人化と同時に総長になった私は、たびたびメディアから「学長のリーダーシップは」との質問を受けました。法律の上では、法人化とともに、大学の学長に非常に大きな権限を与えられるようにはなりませんが、私は、総長とは教員、職員、学生をひきつける言わば磁石であって、その合力として力が発揮できるような環境づくりが一番大切であるという考えのもと、個々の輝く特性を尊重した上で、個人の覇気がなくなるような一方的なリーダーシップを発揮しないことに留意して運営に努めてまいりました。

法人化後、制度上の改革や運営費交付金のカットに伴う総人件費の削減への対応など、多くの課題に直面しました。同時に、競争的資金を含めた外部資金の獲得によって、教育・研究環境の充実に努めなければならず、苦しい状況ではありましたが、就任半年後に公表した「大学運営の基本姿勢」で私の考えを理解し、協力してくれた構成員のおかげで、将来につながる道筋ができたのではとっております。一方、学内組織を大学の責任で改組できるようになったことから、エコトピア科学研究所を設置するとともに、多くの研究科に研究を推進するセンターを設置し、また、施設については、この5年間で教育・研究に必要な各建物の耐震補修あるいは新築をほぼ終えることができ、医学部附属病院、医学系研究科に関係する施設についても全面新築整備がほぼ完成しました。皆様のご努力のたまものと、感謝しております。

本学は、研究重点大学として世界をリードする研究成果とその研究基盤に立脚した教育の質の向上に真摯に取り組んでおり、平成18年からは、本学の学術研究・教育の更なる充実と発展を図るため、インターナショナルアドバイザーリーボードを設置し、ノーベル賞受賞者3名を含む国内外の著名な学識経験者から、本学の学術研究・教育について国際的水準に照らした評価などに基づく助言や提言をいただいています。これまでに、本学からは、高輝度青色発光

ダイオードを実現された赤崎 勇先生や、ノーベル化学賞を受賞された野依良治先生といった非常に優れた研究者が世界で活躍されております。また昨年ノーベル賞受賞者に小林 誠先生、益川敏英先生、下村 脩先生が選ばれたことは、ご記憶に新しいことと思います。本学の大切にしてきた「自由闊達」な学風のもと、よい指導者とともに、のびのびと学生自らの可能性を伸ばしていけるような環境を守り、「勇気ある知識人」を育てていってほしいと思います。

教育・研究を通し社会貢献に努めるのも大学の重要な使命であります。平成17年からは、同窓生や近隣住民の方々に、本学の活動をご理解いただく機会として、ホームカミングデイを実施しております。また、赤崎先生による高輝度青色発光ダイオードの実現とその実用化は、本学が誇る産学連携におけるイノベーションの真のモデルであり、この功績を次の世に伝えるために建設した赤崎記念研究館は、将来とも永きにわたって残る重要な産学連携拠点だと思っております。地域と良い連携を保ちながら、企業の方々と協同して本学の学術成果を基盤としたイノベーションに貢献し、さらに、その成果を地域に還元することは、大学が果たすべき社会的義務であるとともに、学生にとって将来の指標となれば、と考えています。

国際的な連携としては、この5年間に、韓国、上海、北京、バングラデシュ、タイ、ベトナム、カンボジアに全学同窓会の海外支部を、加えて上海には名古屋大学事務所を、米ノースカロライナ州には名古屋大学テクノロジーパートナーシップを立ち上げ、帰国留学生のアフターケア及び知的財産の世界戦略に力を入れてきました。また、市場経済化をして発展途上にあるウズベキスタン、モンゴル、ベトナム、カンボジアに、日本法教育研究センターを設立し、学術、教育を通して国際的なネットワークを構築しつつあります。政治等の問題から、国家間での交流が難しいとしても、大学ならば教育・学術研究をもとにした草の根の交流ができるというのは、大変重要な要素であると思っております。今後も、大学から国際的に良い連携を図っていただきたいと思います。

総長を拝命して5年、この5年間で、地下鉄の環状化により大学へのアクセスが容易になり、大学の周辺環境も大きく変わりました。平成17年には愛知万博が開催されたことに関連し、国際フォーラム及びサテライトシンポジウムを開催したところ多くの方にご参加いただきました。なにより、昨年2月には、トヨタ自動車様及び関係会社様のご理解のおかげで、豊田講堂の全面改修が実現し、名古屋フィルハーモニー交響楽団の演奏会もできる立派な文化拠点として生まれ変わりました。大学は、自己努力だけで発展しているわけではない、地域・社会に支えられていることを決して忘れてはならないと思います。

最後にあたりお願い申し上げたいのは、留学生を含めて、経済的に辛い学生がまだまだ沢山おります。学術奨励賞奨学金、国際学術交流奨励事業等、大学独自の学生支援

事業を立ち上げてはいますが、国の支援はほとんど期待できない状況です。今こそ、日本が若者を育てる、また日本を理解する留学生を育てる環境をつくっていくべきだと思っております。厳しい中ではありますが、是非、名古屋大学基金に、ご支援をいただければありがたいと思っております。

今年は、名古屋帝国大学として設立されて以来70年の節目の年となります。法人化の激動の中、それぞれの立場で大学活動にご尽力いただいた皆様に心からの感謝を申し上げますとともに、名古屋大学の更なる飛躍を祈念して、退任のあいさつとさせていただきます。5年間、本当にありがとうございました。

平成21年 3月



愛知万博記念国際フォーラム



名古屋大学上海事務所



ホームカミングデー



国際学術交流奨励事業等、大学独自の学生支援



エコトピア科学研究所



日本法教育研究センター



赤崎記念研究館



医学部附属病院新中央診療棟



全学同窓会海外支部



名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサート



改修後の豊田講堂



本学関係者 3名の2008年ノーベル賞受賞

2008年ノーベル物理学賞受賞記念 名古屋大学レクチャーを開催



名古屋大学レクチャーシップ表彰楯授与式の様子

2008年ノーベル物理学賞受賞記念 名古屋大学レクチャー「宇宙と物質の根源『対称性の破れ』のかなたに」が、2月7日(土)、豊田講堂において開催されました。

本レクチャーは、本学が主催する最も重要な講演会の一つであり、分野を問わず、世界的に高名な研究者の講演を広く一般市民の皆様へ公開し、現代世界の最高の「知」に触れていただくために行われるもので、講演者には本学で最も栄誉ある「名古屋大学レクチャーシップ」の称号および表彰楯が授与されます。

3回目となった今回の講演者は、本学理学研究科出身で、ともに2008年ノーベル物理学賞受賞の栄誉に輝いた、小林 誠特別招へい教授と益川敏英特別招へい教授で、素粒子物理学の理論研究の発展に多大な影響を与えた「CP対称性の破れ」の問題について講演が行われました。

「CP対称性の破れ」を説明するには、それまで知られていた3種類のクォークだけでは不十分であり、両博士は新たな3種類のクォークの存在を理論的に予見し、1973年の論文で発表しました。その後20年余りを経て、実験によりそれらすべてのクォークの存在が確認されたことで理論

の正しさが証明され、同賞を受賞することになりました。この研究は、両博士が坂田昌一教授以来伝統のある本学理学部における素粒子物理学の蓄積を基礎に完成させたものであり、本学の自由闊達な批判精神に富む学風の中から生まれた世界に誇る研究成果の一つといえます。

当日は、はじめに平野総長、塩谷 立文部科学大臣のあいさつがあった後、山脇幸一理学研究科教授が、「素粒子とは」と題し、素粒子の基礎知識について解説しました。次に、杉山 直理学研究科教授が、「宇宙進化の謎と素粒子」と題し、宇宙はなぜ反物質ではなく物質からできているかという宇宙論の大きな謎を解明するには「CP対称性の破れ」が重要なヒントになることをわかりやすく説明しました。

引き続き行われた名古屋大学レクチャーシップの称号および表彰楯の授与式では、総長から小林博士と益川博士に、「聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆」とされる「麒麟」をモチーフにデザインされた名古屋大学レクチャーシップの表彰楯が贈呈されました。



あいさつをする塩谷大臣



質疑応答の様子



講演を行う小林博士

レクチャーでは、小林博士が、「CP 対称性の破れと素粒子の模型」と題し、素粒子物理学のこれまでの流れや現状について解説し、第5、第6のクォークに関わる「小林・益川理論」の内容や実験による検証の結果等について分かりやすく講演しました。その後、益川博士が、「CP 対称性の破れが我々に語ったこと」と題し、「小林・益川理論」の誕生に至る経緯について紹介しました。少年時代や、坂田博士、湯川秀樹博士とのエピソードにも触れられ、研究への情熱が伝わる講演となりました。

講演後には、中高生からの質問に両博士が答える時間が設けられ、小林博士からは、「好きなことをやるのが一番良い」、また、益川博士からは、「自分が本当に打ち込める問題を探してほしい」と若い世代に期待が寄せられました。最後に、野依良治特別教授と近藤高等研究院長から閉会のあいさつがあり、大盛況のうちに終了しました。

参加者からは、「素晴らしかった」、「良い刺激になった」との感想が多数寄せられました。



講演を行う益川博士

今回のレクチャーでは、本会場となった豊田講堂に加えて、同時中継を行うサテライト会場がIB 電子情報館に設けられ、両会場とも、中学生、高校生や一般市民等の参加者によりほぼ満席となり、名古屋大学レクチャーに対する市民の方々の関心と期待の大きさが伺われました。

また、本レクチャー開催前には、小林博士及び益川博士への本学特別招へい教授の委嘱状交付式が執り行われました。



あいさつをする野依特別教授



ノーベル賞メダル展示の様子

第3回予防早期医療創成プロジェクト シンポジウムを開催

2月5日(木)、野依記念学術交流館において、第3回予防早期医療創成プロジェクトシンポジウムが開催されました。本プロジェクトは、文部科学省「先端融合領域イノベーション拠点の形成」の一環として平成18年に採択され、日本ガイシ、伊藤忠商事、富士通、オリンパスとの協働研究により、「手のひらに名医・大病院」をコンセプトに推進されてきたものです。

採択後3年を経て行われた今回のシンポジウムは、「手のひらに名医・大病院」成果と今後の展望」をテーマに行われました。当日は、まず、プロジェクト総括責任者である平野総長が、「来るべき高齢化社会に向けて、医療の仕組みを変えるイノベーションを目指して研究を推進することは、多くの関連病院を持ち、医工連携研究の歴史のある名古屋大学の、いわば社会的責務である」とあいさつしました。続いて岡谷重雄文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術戦略官（推進調整担当）から、「名古屋大学が目指す“手のひらに名医・大病院”というコンセプトは、実現すれば非常に大きなインパクトをもつイノベーションを引き起こすであろう。イノベーションまでのロードマップを産学で的確に検討していこうとする名古屋大学の姿勢は大変重要であり、その過程でコンソーシアムとして成熟していくのを期待している」と祝辞が述べられました。

その後、東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点リーダーである片岡一則東京大学工学研究科教授による「ナノ治療イノベーションを実現する超分子ナノデバイス設計」と題した基調講演が行われ、続いて、直



あいさつする平野総長

江知樹医学系研究科教授による講演「白血病と幹細胞」、大日方五郎エコトピア科学研究所教授による講演「移動体での生体モニタリング～モデルベース・アプローチによる人の状態推定」が行われました。また、会場では本プロジェクトの研究についての18のポスター展示が行われ、幅広いテーマに関するシンポジウムとなりました。

当日のシンポジウム開催前には、各協働企業の役員を招いて、プロジェクトの最高意志決定機関である「統括会議」が開催され、平成21年度の活動方針について議論が行われました。参加した各企業の経営者からは、研究をイノベーションに結びつける為には、この時期にビジネスモデルを想定することが必要であるとの見解が示され、技術的課題は勿論、社会的課題に関する事項にも積極的に取り組むことが了承されました。会議の最後には、次期総長候補者である濱口医学系研究科長からプロジェクトにかける決意が述べられ、非常に印象深い会議となりました。

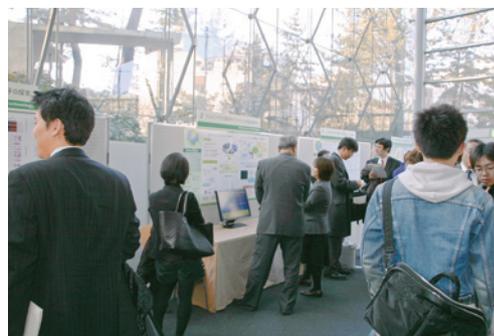
予防早期医療創成プロジェクトは、今後さらにトヨタ自動車、古河電気工業の2社を加え、発展させていく予定です。



あいさつする岡谷戦略官



基調講演を行う片岡教授



ポスター展示の様子

名古屋大学学術憲章を一部改正

2月2日(月)、名古屋大学学術憲章が一部改正されました。

平成12年2月15日に定められた本憲章は、本学の学術活動の基本理念として掲げられ、本学教職員は本憲章の精神に則り学術活動に邁進してきました。このたび、本学関係

者のノーベル賞受賞という吉報が届き、受賞者からは本学の自由闊達な学風に関する好意的な言葉が随所にみられました。この改正では、本学が自由闊達な学風の下で学術活動を行い、その使命を果たすことが明示されたものです。

以下に本憲章の全文を掲載します。

名古屋大学学術憲章

名古屋大学は、学問の府として、大学固有の役割とその歴史的、社会的使命を確認し、その学術活動の基本理念をここに定める。

名古屋大学は、自由闊達な学風の下、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする。とりわけ、人間性と科学の調和的発展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をともに視野に入れた高度な研究と教育を実践する。このために、以下の基本目標および基本方針に基づく諸施策を実施し、基幹的総合大学としての責務を持続的に果たす。

1. 研究と教育の基本目標

- (1) 名古屋大学は、創造的な研究活動によって真理を探究、世界屈指の知的成果を産み出す。
- (2) 名古屋大学は、自発性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てる。

2. 社会的貢献の基本目標

- (1) 名古屋大学は、先端的な学術研究と、国内外で指導的役割を果たしうる人材の養成とを通じて、人類の福祉と文化の発展ならびに世界の産業に貢献する。
- (2) 名古屋大学は、その立地する地域社会の特性を生かし、多面的な学術研究活動を通じて地域の発展に貢献する。
- (3) 名古屋大学は、国際的な学術連携および留学生教育を進め、世界とりわけアジア諸国との交流に貢献する。

3. 研究教育体制の基本方針

- (1) 名古屋大学は、人文と社会と自然の諸現象を俯瞰的立場から研究し、現代の諸課題に応え、人間性に立脚した新しい価値観や知識体系を創出するための研究体制を整備し、充実させる。
- (2) 名古屋大学は、世界の知的伝統の中で培われた知的資産を正しく継承し発展させる教育体制を整備し、高度で革新的な教育活動を推進する。
- (3) 名古屋大学は、活発な情報発信と人的交流、および国内外の諸機関との連携によって学術文化の国際的拠点形成する。

4. 大学運営の基本方針

- (1) 名古屋大学は、構成員の自律性と自発性に基づく探究を常に支援し、学問研究の自由を保障する。
- (2) 名古屋大学は、構成員が、研究と教育に関わる理念と目標および運営原則の策定や実現に、それぞれの立場から参画することを求める。
- (3) 名古屋大学は、構成員の研究活動、教育実践ならびに管理運営に関して、主体的に点検と評価を進めるとともに、他者からの批判的評価を積極的に求め、開かれた大学を目指す。

岐阜銀行、G-VEC と産学連携に関する協定を締結

2月3日(火)、本学は、株式会社岐阜銀行及び株式会社G-VEC と産学連携に関する協定を締結しました。

締結式は、豊田講堂特別会議室において行われ、岐阜銀行から大熊義之頭取、G-VEC から齊藤伸宏社長、本学から宮田産学官連携推進本部長が出席し、連携への期待を確認しあった後、協定書が取り交わされました。



協定書を取り交わした(右から)大熊頭取、宮田本部長、齊藤社長

岐阜銀行は、岐阜市に本店を置き、美濃地方から名古屋市にかけての中京都市圏を営業エリアとする銀行で、経営理念に「豊かなシルバー社会の応援」を掲げ、同社の社内ベンチャーであるG-VECとともにシニアネットワークを形成し、シルバー社会を応援するための新たなビジネスモデルの構築を目指しています。高齢化社会の急速な進展に伴う介護用設備や自立支援に向けた製品等の開発、また、岐阜県には航空機産業等で優秀な企業も多いことから、地域の産業技術を活かした産学連携が期待されます。

本協定の締結により、本学の研究成果の活用が一層広がり、当地域の発展に貢献できるようになるとともに、三者が円滑な連携協力、相互の発展を目指すことにより、それぞれが有する人的・物的資源や知的財産を有効に活用できる機会を創造・提供し、地域経済の活性化および学術の発展につなげていきます。

平野総長が米国 UCLA を訪問 学長と会談、イグナロ IAB 委員に感謝状を贈呈

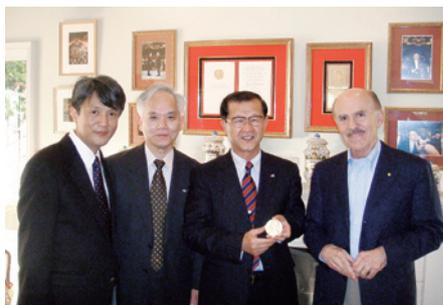
平野総長は、1月26日(月)、濱口医学系研究科長らとともにカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)を訪問し、ジーン・ブロック学長、ニコラス・エントリキン副学長代行と会談しました。会談では、日本の国立大学法人の現状、本学出身者のノーベル賞受賞、それぞれが加盟するコンソーシアム等が話題となり、ブロック学長は本学が事務局を務めるAC21に関心を示していました。同学長は、本学とは昨年の全学間学術交流協定締結以来、大変良好な関係を構築できたとして、平野総長の退任を惜しむとともに濱口次期総長との緊密な関係の維持を約束し、本年8月

の来日にあわせた本学訪問の意向を表明しました。同学長との会談に先立ち、総長と福田敏男工学研究科教授は、ビジャイ・ディア工学研究科長と会談し、既に協力関係にあるマイクロ・ナノメカトロニクス分野のグローバルCOEプログラムによる教育研究交流の更なる拡大について合意しました。一方、濱口研究科長と粕谷英樹同研究科講師は、ジェラルド・レビイ医学研究科長と会談し、医学分野における学生及び研究者の交流について協議を行いました。

総長らは前日の25日(日)、インターナショナルアドバイザリーボード(IAB)委員を務めたルイス・イグナロ同大教授を訪ね、感謝状を贈呈しました。一行は、同教授宅のノーベル賞関係の記念品を集めた部屋において展示物の説明を受け、受賞式出席の様子を聞きました。同教授からは、今回の本学出身者のノーベル賞受賞に対するお祝いの言葉とともに、今後も学生向けの講演や大学に対する助言を行うなど本学のために貢献したいとの提案がありました。



ブロック学長と会談する平野総長と濱口研究科長



イグナロ教授訪問の様子(左から粕谷講師、濱口研究科長、平野総長、イグナロ教授)

宮田理事が第2回日中大学学術フォーラムに出席

2月7日(土)、第2回日中大学学術フォーラムが、京都大学において開催され、本学から宮田理事が出席しました。

本フォーラムは「日中の大学における学生交流推進について－学術交流の連携を基盤として－」をメインテーマに、まず前日に学部学生及び大学院学生が「日中学生交流の現状と課題」、「日中共通問題と学生の貢献」、「日中相互理解



フォーラムの様子

のための学生交流のあり方」の3つのグループに分かれて議論を行い、フォーラム当日に、参加した学長らに対し報告を行うという形式で実施されました。報告では、これまでの日中学生交流の課題等を掲げつつ、「全ての大学院授業の英語化」、「学生による交流組織の新設」、「インターネットを通じた交流ネットワークの構築」等の斬新な提案があり、続いて、学長らによる講評、学生との白熱した質疑応答が行われました。宮田理事は「学生からの報告は非常に参考になった。本学には多くの中国人留学生在籍しているが、皆が所属研究室の研究推進に欠かせない存在になっている。将来、彼らの中からノーベル賞受賞者が生まれることが私の夢である。」と発言しました。

最後に幹事校である京都大学、慶應義塾大学、復旦大学の学長から、今後、本フォーラムを2年に1度開催される日中学長会議を補足し民間の視点から柔軟に議論ができる場として位置づけたいとの提案があり、質の高い持続可能なフォーラムを目指すことが確認されました。

平成21年度名古屋大学入学試験を実施

平成21年度名古屋大学入学試験（一般選抜の個別学力検査）が、2月25日(水)、26日(木)の2日間、東山地区及び大幸地区の2地区の試験場で行われ、合計1,708名の募集人員に対し、4,891名が受験しました。

試験当日は、あいにくの雨の中、豊田講堂テラスやグリーンベルト周辺に受験者が朝早くから集まり、引率教師



試験会場の様子

からの試験前の注意事項に耳を傾け本番に備えていました。また、受験票を片手に緊張した面持ちで来学した受験者を案内する職員や学生の姿がキャンパスのあちらこちらで見られました。

1日目は、午前10時から外国語の試験が全学部において一斉に始まり、午後には、理科、地理歴史、小論文の試験が行われ、平野総長、高橋理事が各試験場を訪れ、試験場主任や試験場本部の教職員を激励しました。また、2日目には午前10時から数学の試験が、午後からは国語の試験が行われ、午後3時55分にすべて終了し、試験を終えた受験者はお互いに試験問題について話し合うなどして、家路につきました。

なお、前期日程の合格発表が、3月8日(日)午前11時から豊田講堂において行われました。

また、医学部医学科については、今年度から新たに「緊急医師確保対策」として3月12日(木)にも後期日程試験(面接選考)が実施されました。合格発表は、3月20日(金)10時から医学部鶴舞キャンパスにおいて行われます。

東山地区が名古屋市エコ事業所優秀賞を受賞

本学東山地区の環境に関する取り組みが、名古屋市エコ事業所優秀賞を受賞し、2月4日(水)、名古屋市中区役所ホールにおいて、表彰式及び事例発表会が行われました。

名古屋市では、事業者の自主的な環境保全の取り組みを促進するため、平成13年度からエコ事業所認定制度を開始し、平成19年度から名古屋市エコ事業所優秀賞の制度を策



表彰式の様子

定しました。優秀賞は、エコ事業所のうちCO₂削減やゴミの減量に成果を上げているなど、特に優秀で他の模範となる取り組みを実施している事業所を表彰し、優秀な事例を広く紹介することによって、エコ事業所全般における意識の向上及び環境配慮活動のレベルアップを図るものです。

今回は、17事業所の応募があり、5事業所が優秀賞に選ばれました。本学東山地区の受賞理由として、①エネルギーマネジメント研究・検討会が省エネルギーのためのさまざまな調査・研究を行い、研究成果を毎年報告し広く社会に発信していること、②環境負荷低減のための空調及び照明のインバータ化、高効率変圧器導入、複層ガラス・遮熱フィルム・遮熱塗装の採用、デマンド監視などの実績、③毎月のエネルギー使用量、省エネに関する取り組みのHP掲載、④省エネ推進担当者(約900人)を選任し、日常的に省エネ行動を実行する体制を整備していること、などが挙げられました。

事例発表会の内容は、施設管理部のホームページ(<http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/FMD/INDEX.HTML>) エネルギー情報→名古屋市エコ事業所優秀賞に掲載しています。

防災教育チャレンジプラン優秀賞を受賞

2月14日(土)、小学校での防災教育実践「土地の古老の三河地震被災体験談から学ぶわたしたちの防災術」が、内閣府の防災教育チャレンジプラン優秀賞を受賞しました。

木村玲欧災害対策室助教を代表とする歴史災害教訓伝達プロジェクトは、この5年間、死者2,306人を出した東海地方の歴史災害「1945年(昭和20年)三河地震」について、被災者へのインタビューによって災害像と教訓を視覚化・物語化する活動を行ってきました。特に最近の1年は、被災体験談・絵画をもとにした防災教材・教育プログラムを開発し、安城市内の志貴小学校、祥南小学校、桜林小学校

の3校において実践を行ってきました(本誌183号、186号、189号に掲載)。

本プランでは「1クラス・1年間」、「多人数・2時間」という2つのプログラムを実践し、その中で、地域の歴史災害である三河地震を学ぶことで子どもたちの防災マインドを高め、自発的に学習・活動するプログラムを作り、更には学習成果を家族や地域に還元する仕組みを作りました。最終報告会では、木村助教とともに、志貴小学校の岩月佐江子先生、6年生の酒井夏海さん・中根可南子さんが発表を行い、2人の児童が審査員の前で三河地震の被災体験劇を上演しました。これらの一連の実践について「地域の歴史災害を児童が学び、その成果を地域へ還元する素晴らしい防災教育実践」との評価をいただき、受賞が決定したものです。

今後も、教育研究活動および地域貢献活動として本活動を推進していく予定です。



最終報告会の様子



授賞式の様子(桶を受けとっているのが岩月先生、後ろの左から木村助教、中根さん、酒井さん)

平成20年度個人情報保護に関する教育研修会を開催

平成20年度個人情報保護に関する教育研修会が、2月5日(木)、東山地区の国際開発研究科棟多目的オーディトリウムにおいて、また、2月13日(金)、鶴舞地区の医学部附属病院中央診療棟講堂において開催されました。

この研修会は、全教職員を対象として、保有個人情報の適正な取扱いと情報セキュリティに関する知識を深め、個



教育研修会の様子

人情報保護について意識の高揚を図ることを目的として、個人情報保護法の施行以来、毎年実施されているものです。

5日には、個人情報総括保護管理者である高橋理事から開会のあいさつがあった後、小木曾保幸監査法人トーマツ名古屋事務所マネージャーから情報セキュリティ対策について、竹内義則情報連携統括本部情報戦略室准教授から本学における個人情報漏えい等事案について、市橋克哉法学研究科教授から、最近本学で取り扱った保有個人情報の開示請求等の事例を引き合いに、関係法令に基づく個人情報保護及び法人文書管理に関する留意点等について、それぞれ講義が行われました。

また、13日には、松尾医学部附属病院院長から開会のあいさつがあった後、市橋教授及び竹内准教授から、医療従事者等に対して診療情報の取扱い等に関する講義が行われました。

本研修には両日で合計約160名が参加し、個人情報の保護に関する社会の要請がますます強まる中、受講生は日常業務に役立つ有益な講義に熱心に耳を傾けていました。

平成20年度事務職員の海外研修報告会を開催

平成20年度事務職員の海外研修報告会が、2月10日(火)、CALEフォーラムにおいて開催されました。

今回は、文部科学省「国際教育交流担当職員長期研修プログラム(LEAP)」修了者1名、本学の「事務職員の海外研修」参加者13名及び「米国ミネソタ大学における事務職員の実地研修」参加者2名の合計16名から報告があり、会場は80名を超える出席者の熱気に包まれました。



報告会の様子

LEAPは、米国の大学における語学研修とインターシップを組み合わせたプログラムで、国際交流担当職員の海外における研修を通じて、大学の国際競争力の強化等を図ることを目的としています。一方、「事務職員の海外研修」は、公募制を採用し、参加者が研修計画を立案することで本学のアジアを中心とした国際交流戦略等について認識を深め、もって事務職員の能力・意識の向上を図っています。また、「米国ミネソタ大学における事務職員の実地研修」は、本学が大学国際戦略本部強化学業の一環として初めて実施したもので、ミネソタ大学において業務を経験することで、グローバルな大競争時代に対応できる能力を備えた国際業務担当職員を育成することを目的としています。

報告会では、高橋事務局長から職員研修に寄せる期待が述べられた後、研修参加者から研修の概要及びその成果が報告され、訪問先大学と本学との比較を通じて今後の業務運営に参考とすべき点も提言されました。

終了後の懇親会では、研修参加者を囲んで懇談が行われ、通常業務では関わる機会が少ない事務職員の交流が図られるなど、大変有意義な機会となりました。

第21回経営協議会、第10回総長選考会議を開催



経営協議会の様子

第21回経営協議会が、2月21日(土)、名古屋市内において開催されました。

会議では、平野総長のあいさつの後、附属図書館の現状と課題について、伊藤附属図書館長から説明が行われました。次いで、法人評価・法科大学院認証評価、本学の財政状況、平成21年度予算、人事院勧告への対応、契約職員の取扱いについて各担当理事、副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。引き続いて、ノーベル賞の受賞、名古屋大学学術憲章の一部改正、全学的運用定員の解除に伴う年俸制適用職員等の雇用、留学生30万人計画、英語新カリキュラムの実施、平成21年度入学者選抜出願状況について、高橋理事から報告が行われました。

外部委員からは、高等教育を取り巻く状況、大学図書館の在り方等について、貴重な御意見が寄せられました。

なお、同日には第10回総長選考会議も開催され、総長選考規程の一部改正等について審議の結果、了承されました。

吉村生命農学研究科教授と勝野高等研究院特任講師が日本学術振興会賞を受賞

吉村 崇生命農学研究科教授と勝野雅央高等研究院特任講師が、第5回(平成20年度)日本学術振興会賞を受賞しました。今回は、374名の被推薦者の内、24名の受賞が決定したものです。

同賞は、日本学術振興会により、優れた研究を進めている若手研究者を見だし、早い段階から顕彰してその研究意欲を高めるとともに、独創的、先駆的な研究を支援することにより、我が国の学術研究の水準を世界のトップレベルに発展させることを目的に、平成16年度に創設されたものです。

今回の受賞対象となった研究テーマは、吉村教授が「春を感知するウズラの生物時計の仕組み」、勝野講師が「神

経変性疾患の病態解明および治療法開発」です。

なお、授賞式は、3月9日(月)、東京都台東区の日本学士院において行われました。

平野総長らが総合運動場複合棟を視察



視察の様子

2月17日(火)、平野総長は、杉山理事らとともに、1月末に完成した総合運動場複合棟を視察しました。

同棟は、これまで陸上競技場近辺に点在していた更衣室と体育会の部室等を新たに一つの建物に集約したもので、総合運動場の中心付近に建設され、軽量鉄骨造2階建てで延べ面積は約650m²です。また、その名が示す通り、総合保健体育科学センターが行う「健康・スポーツ科学」の講義や実習用の2つの講義室、シャワー室付き更衣室、非常勤講師室の他、課外活動施設として、4つの部室と防音仕様の音楽練習室が併設されています。屋根には遮熱塗装が施され、主な部屋には空調や防犯カメラも完備されています。この複合棟には、ギリシャ語で運動競技を意味するGYMNO(ジムノ)と歌・音楽を意味するMELOS(メロス)とを組み合わせた“GYMNO-MELOS”という愛称がつけられ、本学学生にスポーツや音楽を通じて友情や信頼を培ってほしいという願いが込められています。

途上国の教育開発・改革に関する研究

大学院国際開発研究科准教授
北村 友人

開発途上国（以下、途上国）が経済成長を進めるとともに社会的・政治的な面での安定を実現していくうえで、教育分野の開発や改革の必要性が広く認識されるようになり、国際機関や先進諸国、さらには市民社会組織などによる国際教育協力が、多くの途上国で活発に実施されています。そうしたなか、今日では、国際的な支援に頼り過ぎるのではなく、途上国自身が有する能力や資源を活用して自立的な教育開発・改革を進めていくことの重要性が、多くの研究者や実務家たちによって指摘されています。

途上国の教育開発・改革の過程を見ると、深化するグローバリゼーションやネオ・リベラリズム思想などの影響を強く受けるなかで、教育行財政の地方分権化をはじめ、市場原理にもとづく規制緩和や競争原理の導入が明らかに進んでいます。また、援助する側の国際機関や先進諸国と途上国の間で対等なパートナーシップを構築したり、途上国内における統治システムの整備や市民社会の形成などを促したりするうえで、政治的かつ組織・制度的な課題が山積しています。さらに、多様な民族によって形成される途上国社会では、言語や慣習、生活様式の違いによって、国家の規定する教育内容の妥当性について国民の間での合意を得ることが必ずしも容易ではないといった、文化的な課題も根深く存在しています。途上国の教



カンボジアの小学校
(教室不足のために複式学級で授業を行っている)

育開発・改革を推進していく過程では、こうした政治、経済、社会、文化などを取り巻く条件や環境も踏まえたうえで、より効果的な教育政策のあり方を考えていくことが欠かせません。

このような途上国の教育開発・改革の状況について、とくにインドシナ諸国（カンボジア、ベトナム、ラオス）を事例として取り上げ、どのようなアクターたちが教育政策の策定や実施の過程でそれぞれの役割を果たしているのかといったことについて、アクター間の関係を示すモデル(図1)などを構築しながら分析を進めています。

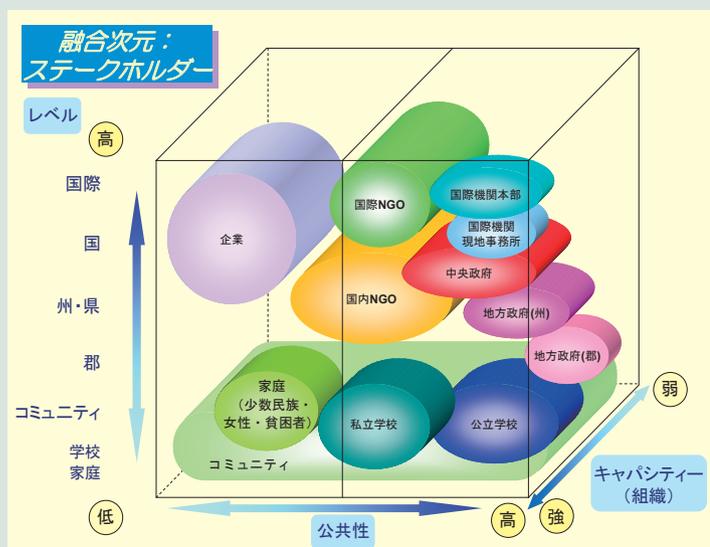


図1 教育開発・改革に関するアクター間の相互関係

リポソームを用いたリアルタイム観察から明らかになった 第4の細胞骨格セプチンの能力

滝口 金吾 大学院理学研究科助教

セプチンは植物以外の全ての真核生物から見いだされ、しかも種を越えてよく保存されている蛋白質です。セプチン同士が重合することによって線維を作ることができ、細胞の形態形成・運動や細胞分裂など細胞の機能に必須なことから、セプチンはアクチン線維、微小管、中間径線維に続く第4の細胞骨格と考えられています(注)。セプチンの欠損や異常が、生物に致死を招き、神経変性、不妊症、腫瘍発生などの多くの疾患の発症進展に関与していることなど、その重要性が数多く

示されてきたにも関わらず、セプチンの基本的な性質が不明であったため、セプチンの生体内での詳しい役割や作用機構についてはまだ分かっていませんでした。

セプチンが今まで知られている細胞骨格と異なるのは、リン脂質と結合して直接生体膜に作用できるところです。実際セプチンは、細胞内の膜付近に多く局在しています。そこで私たちのグループは、ブタやラットの脳から抽出したセプチンを含む試料や、昆虫細胞で発現させ単離してきたセ

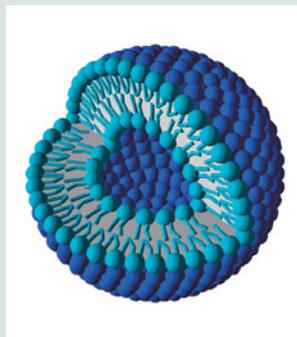


図1 人工脂質膜小胞、リポソーム (liposome) の模式図。リン脂質などの両親媒性分子が水溶液中に存在すると、自己集合して脂質二重膜を形成し、さらに自然に閉じて膜小胞、リポソームを形成します。特に直径が数ミクロンから数十ミクロンあるものは巨大リポソームと呼ばれます。リポソームは古くから脂質二重膜を基本構造に持つ膜の最も単純化したモデルとして多くの実験研究に使われてきました。

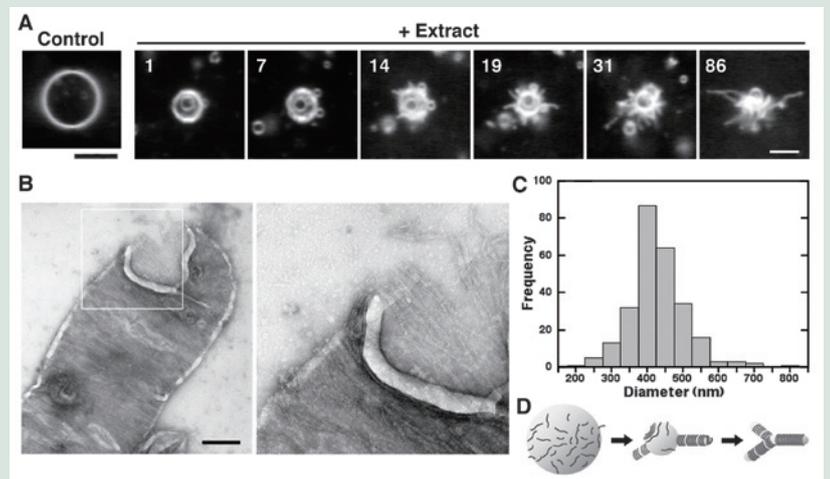


図2 セプチンによるリポソームの膜突起形成

A、暗視野顕微鏡像。左端はセプチンを加える前の球形をしたリポソーム、右はセプチンの添加によって突起を形成伸長させるリポソーム、数字は変形開始からの経過時間(秒)。バー：10 μ m。
B、電子顕微鏡像。突起先端部(左)とその白枠部分をさらに拡大した写真(右)。試料作成中に膜が破れた部分にもセプチン線維が残っており線維の配向が明瞭に見取れます。バー：200 nm。
C、電子顕微鏡像から測定した膜突起部分の太さの分布、430 \pm 79 nm (261例の平均 \pm 標準偏差)。
D、突起形成をしたリポソームの模式図

プテンを、細胞とほぼ同じサイズを持つ巨大リポソームに作用させ、リポソーム膜にどのような変化が現れるかを光学顕微鏡の一種、暗視野顕微鏡を用いてリアルタイム観察しました（図1）。その結果セプチンに膜突起を誘導する強力な活性があることを世界で初めて明らかにし、膜突起の形成伸長過程を可視化することに成功しました（図2A）。セプチンが突起形成を起こしたリポソームの膜上でどのような構造を作っているのかさらに調べるために、暗視野顕微鏡でリポソームの変形

を前もって確認した試料を電子顕微鏡で観察したところ、セプチンは膜の表面で重合して線維を形成しており、セプチン線維は管状に伸びた膜突起の周囲を取り巻くように並んでいました（図2B）。しかもリポソームの膜突起部分の太さは約400 nmと揃っており（図2C）、これは神経シナプス形成に重要なスパイン構造や精子鞭毛の付け根部分などと同じ大きさです。今回の私たちの発見により、今まで役割や機能が明確ではなかった第4の細胞骨格であるセプチンが実はダイナミックで細胞膜の形態制御に直接関与していることが明らかになりました（図2D）。脂質二重膜の表面では、線維を形成したセプチンがさらに高度なアレイを作り、このセプチンの重合と膜の湾曲とが同時に調和して起きることによって、観察されたような膜の変形が生じることが考えられます（図3）。

今回私たちが用いた実験系によってセプチンの活性を評価することが可能になったので、今後さらに研究を進めることでより詳しい生体膜の形態制御機構を明らかにし、セプチンが関与すると考えられている多くの疾患の発症機構を解明していきたいと考えています。

注) 細胞骨格: 重合して線維形成する蛋白質群の総称で生物に必須です。アクチン線維と微小管は古くからよく研究されています。アクチン線維は筋肉や心臓など組織器官などの運動から1個の細胞の形態形成や運動まで担っています。微小管は、例えば神経軸索内では神経伝達物質などの運搬に関与し、また真核生物の鞭毛や繊毛運動を担い、細胞が分裂する際には紡錘体を形成して染色体の均等分配に関与します。

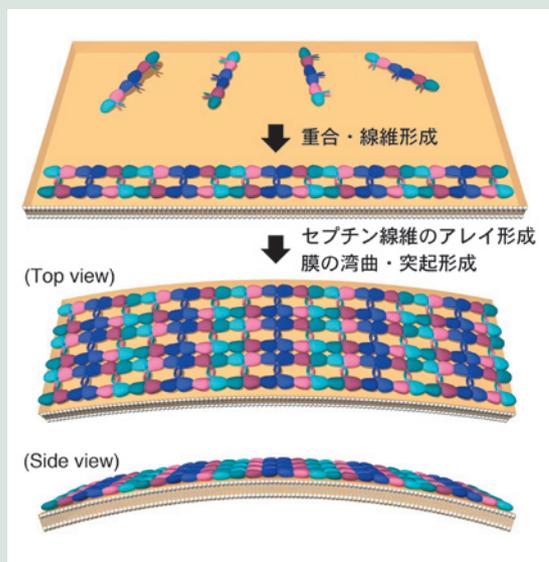


図3 膜表面でのセプチンの重合・線維形成・アレイ形成と膜突起形成のモデル
ヒトなどの場合では、セプチンは2個のヘテロ3量体が繋がってできた6量体が基本ユニットとなって重合し線維形成をします。その側面には隣り合った線維と相互作用できる部位が突き出ていると考えられ、これによってセプチン線維同士が配向し合ってアレイ形成されると考えられます。

1986年東北大学理学部生物学科卒業、名古屋大学大学院理学研究科に進学。1991年理学博士号取得。1994年名古屋大学理学部助手、1996年より現職。

ひとこと：動くもの変形するものが大好き。生き物の変態する様に感動し、アニメ「パベル2世」のロテムや映画「遊星からの物体X」の“主人公”を羨ましく思う。

趣味：サッカー観戦（扇風はグランパス、ちなみに野球の方はドラゴンスのファン）、囲碁将棋などのボードゲーム。

たきぐち きんご



「学問のススメ 論文へススメ」
2008年度名古屋大学学生論文コンテスト



高等教育研究センターと教養教育院は、附属図書館の後援、三省堂名古屋テルミナ店のご協力を得て、2008年度名古屋大学学生論文コンテストを実施しました。このコンテストは、2007年度に始められたもので、学部学生に論文執筆の機会を提供することでスキル向上を図るとともに、学問の世界を身近に感じてもらうことを目的としています。

2度目の開催となる今回は、「論文書き方講座」を秋に開催して、アカデミック・ライティングの基礎を学ぶ機会を設けました。コンテストについては11月中旬に現代の社会問題をテーマとする論文募集を告知し、1月16日に応募を締め切りました。学内教員による厳正な審査の結果、以下のとおり3点の入選論文が決定されました。

今年の応募総数は15件と昨年の14件から微増に

とどまりましたが、一方で論文の質は向上している、というのが審査員の評価です。問題の立て方や文献の引用などに粗さが残るものもありましたが、抽象的な問題に真っ向から取り組もうとする論文、身近な問題にオリジナリティのある答えを求めた論文、社会的に重要な問題に展望を提示しようとする意欲的な論文、などなど、健闘ぶりが光りました。ただし、昨年に引き続き理系学生からの応募が少なかったこと、アンケート調査の信頼性に留意が必要な論文が散見されたことなど、今後の課題も残りました。来年度以降の開催・告知の方法や「論文書き方講座」の内容を工夫し、多くの学生に論文執筆に取り組んでもらえる環境を作っていく予定です。

なお、入選した論文は名古屋大学リポジトリにて近日中に公開されることになっています。

受賞者

賞	氏名	所属・学年	論文題目	講評
優秀賞 (附属図書館長賞)	奥田ゆかり	経済学部 1年	レポートの丸写しと大学生の意識	身の回りに題材を求めている。独自のアンケート調査によりオリジナリティのある答えを導いている。
優秀賞 (三省堂名古屋 テルミナ店賞)	王 昊凡	文学部 3年	多文化主義をめぐる公共性の 問題に関する一考察	大きなテーマに真っ向から取り組んでいる。多くの先行文献を踏まえておりレビューとして水準が高い。
優秀賞	山田 悠至	医学部 1年	9・11 以後のアメリカ外交と 安全保障に関する一考察	文章に緻密さと読者をひきこむ勢いがある。先行文献を踏まえたうえで独自のモデルによって将来展望を提示している。

国際経済政策研究センター・キタン国際学術シンポジウムを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、2月6日(金)、野依記念学術交流館において、「ものづくり経営における英知」をテーマとする国際シンポジウムを開催しました。

平野総長による開会の辞に始まり、次に、AC21の重要なメンバー校である英国ウォーリック大学のトーマス・



パネルディスカッションの様子

アーレン ビジネス・スクール副研究科長、トヨタ自動車の内山田竹志副社長が講演を行いました。

アーレン教授の講演では、海外から見た日本のものづくり経営の特徴として、経営者が製造現場の近くに位置していることや部門間の連携及び調整がスムーズに行われていることなどが指摘された上で、実践理論という方法論を用いた管理会計研究について紹介されました。

内山田副社長の講演では、トヨタ生産方式について、その源流から確立されるまでの歴史が説明され、トヨタがグローバル化に伴って海外に展開していく様子と、そこでの課題が示されました。

続いて行われたパネルディスカッションでは、講演者2名に、座長として河田 信 名城大学教授、パネリストとして廣本敏郎一橋大学教授と木村彰吾同研究科教授が加わりました。ここでは、リードタイム短縮が競争力を高め、長期的には利益に貢献しているにもかかわらず、財務諸表上の会計数値の向上に直結しないという問題が明らかにされました。

当日の参加者は190名にも上り、盛会のうちに終了しました。

ライフトピア老年学セミナー開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、2月1日(日)、ライフトピア老年学セミナー「老いていく社会 老年学(ジェロントロジー)の発展」を、柴田博桜美林大学大学院老年学研究科特任教授を講師に迎えて保健学科東館において開催しました。

高齢者医療では病気以外に介護や住まい、経済、終末期の判断など、学際的対応を不可欠とする問題が多く生じてきています。老年学は加齢およびその周囲にある諸問題を多面的に扱う学問分野ですが、欧米で発展をみる一方、我

が国では桜美林大学にただ一つの大学院コースがあるのみでした。しかし本学医学部老年情報学寄附講座のライフトピア構想において学際連携が進められているほか、東京大学ではジェロントロジー寄附研究部門が設置され学部横断型教育プログラムも開講されているように、我が国でもようやく老年学が萌芽してきています。

循環器疾患の疫学研究に通じた医師である柴田教授は、サクセスフル・エイジングの条件として長寿、高い生活の質(QOL)、高いProductivity(社会貢献)を挙げ、食生活や運動、社会サポートなどを包括的に解説しました。当日は、215名もの参加者で会場は満員となり、参加者を対象に実施されたアンケートでは、健康や社会、生きがいづくりなどに老年学が関わるニーズが高く示されるとともに、老年学の系統的な教育プログラムを求める声が多数寄せられました。



講演する柴田教授



会場の様子

複合材工学研究センターの看板上掲式を挙

●大学院工学研究科

工学研究科は、2月2日(月)、2月1日付けで同研究科附属施設として設置した「複合材工学研究センター」の看板上掲式を挙行しました。

同センターは、航空宇宙分野の複合材料の製品化を背景に、今後の関連する技術課題の解明を図るとともに、学内の教育及び研究活動体制を横断的に構築するとともに我が



上掲式の様子(左から、上田センター長、小野木研究科長)

国の航空宇宙関連機関及び産業との連携協力体制を確立し、さらに広く関連機械産業を含む航空宇宙技術分野の人材育成並びに中部地域が拠点となっている航空宇宙関連産業への技術貢献と更なる先端複合材料研究の発展に貢献するために設置されたものです。

上掲式は、小野木工学研究科長、上田同センター長をはじめ、学外からは、同センターの設置に関して支援をいただいた石川隆司宇宙航空研究開発機構研究開発部本部長、頼政裕和三菱重工(株)名古屋航空宇宙システム製作所副所長の出席のもと、行われました。

上掲後に行われた記者会見では、小野木研究科長からあいさつがあった後、上田センター長から同センター設置の趣旨説明が行われ、次に、来賓として出席した石川本部長、頼政副所長から本学と同センターへの期待を込めた祝辞がありました。出席した報道関係者との間では予定時間を大幅に超えて質疑応答が行われ、同センターへの期待が伺われました。

オランダ・ワッハニンゲン大学、アムステルダム自由大学と学術交流協定を締結、特別セミナーを開催

●大学院生命農学研究科、大学院環境学研究科、地球水循環研究センター

大学院生命農学研究科、大学院環境学研究科および地球水循環研究センターは、オランダのワッハニンゲン大学、アムステルダム自由大学との間に学術交流協定を結び、1月27日(火)に協定書への調印式を行いました。今後、大学院生や若手教員の交換留学やスタッフ交流、関係部局教員による博士課程後期課程の学生の指導や、地球生命圏研究機構の協力も得た共同研究の推進などにより、3大学間での活発な教育研究活動の連携が期待されます。

交流活動の一環として、ワッハニンゲン大学のエディー・

ムアーズ博士、アムステルダム自由大学のミヒール・ファンデアモレン博士による特別セミナーを、翌1月29日(木)、生命農学研究科において開催しました。ムアーズ博士からは「Land atmosphere interactions: Feedbacks across scales」、モレン博士からは「Ecohydrology of Northern Ecosystems-Land cover change, CO₂, global climate and regional patterns」と題し、話題の提供がありました。この中で、水・エネルギー・物質循環を介した地球生命圏でのフィードバックのメカニズムの基礎、この

理解に基づいた環境変動下でのライン川の流域管理問題、シベリア・ツンドラ地帯でのメタン発生特性の具体例が紹介されました。当日は、学生約12名、本学スタッフ4名、学外から1名の参加があり、活発な討論が行われました。



生命農学研究科で行われた特別セミナーの様子



学術交流協定調印式後の関係教員による記念撮影

農学部がカンボジアにおいて海外実地研修を実施

●農学部

農学部資源生物科学科は、1月19日(月)から25日(日)、初回となる海外実地研修を3年生向けに開講しました。研修地として選んだカンボジアは、現在各国からの支援を受けながら農業を基幹産業としつつ急速に発展している国であり、ここでは農業と社会との関わりをつぶさに体験することができます。研修では、農学部3年生の5名が、これ



研修に参加した本学農学部と王立農業大学の学生及び引率教員

まで密接な交流を進めてきたカンボジア王立農業大学の3年生5名とともに、農村を廻り、自分で現場を見て、また農家の人たちから直接話を聞きました。農業生産力とそれに伴う生活水準が対照的な2つの農村について、なぜそのような差異が生じるのかを、それまでの講義や実験実習で学んできたことを総動員して自分自身で考える、というのが主要なテーマでした。最終日には、学長、学部長を始めとする教職員や多くの学生の参加のもと、両大学の参加学生による成果発表会と修了式を行い、地元のテレビや新聞等にもその模様が報道されました。

引率には、王立農業大学からの3名の教員に加え、農学部から3名の教員と1名の事務職員、農学国際教育協力研究センターから2名の教員があたりました。特に同センターの伊藤香純准教授、榎原大悟准教授を中心として、事前研修で、カンボジアの社会や歴史、農業や他の産業、さらには科学的調査方法について詳しく学び、討論していたこと、また事前に王立農業大学や対象農家との間で綿密な調整による周到な準備をして臨んだことにより、短期間の研修を効率的に進め、実りの多い内容にすることができました。

アジア・アフリカ学術基盤形成事業国際セミナーを開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、1月23日(金)から25日(日)の3日間、タイ・バンコクにおいて、チュラロンコン大学経済学部との共催により、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業国際セミナー「グローバル時代のアジアにおける新たなダイナミズムの胎動と人材育成」を開催しました。同セミナーは、グローバル化や国際分業体制の再



セミナー参加者の集合写真

編等によりアジアに生じた新たな動きが発展途上国にもたらす影響を解明し、アジア後発途上国の経済発展に必要な産業人材育成のための課題を明らかにすることを目的とする国際共同研究の第1回セミナーとして開催され、9カ国12大学・研究機関の研究者ら約70名が参加しました。

セミナーでは、隈丸優次在タイ日本大使館公使、クア・ウォンブンシン チュラロンコン大学副学長、山本理事、ティラナ・ボンマカパット チュラロンコン大学経済学部長のあいさつ、岡田亜弥国際開発研究科教授による概要説明に始まり、1日目と2日目に、農業、製造業、観光産業、教育、地域統合、労働市場、ガバナンス、貧困削減の8セッションで合計16本の論文発表があり、活発な議論が行われました。3日目には、2つの学生セッションにおいて、国際開発研究科とチュラロンコン大学の大学院博士課程学生6名が報告を行いました。続いて、同事業を通して構築された「開発のためのアジア学術ネットワーク (ANDA)」の運営会議が行われ、今後、ANDA事務局を国際開発研究科に設置し、ANDAを通じて、アジアの持続的経済成長と貧困削減の達成に向けて活動を行っていくことが合意されました。

第1回地球生命圏研究機構国際ワークショップを開催

●地球生命圏研究機構

地球生命圏研究機構 (SELIS) は、1月26日(月)、27日(火)の2日間、第1回国際ワークショップ「Eco-Climate Dynamics in Eurasia / Monsoon Asia」を、シンポジオンホールにおいて開催しました。

同ワークショップは、国内外からの招待講演を含めた18件の口頭発表と、学内関連部局の大学院学生を中心とした

21件のポスター発表からなり、海外からの招待講演者5名を含め、計82名が参加しました。

冒頭に、山本理事が本学の研究活動について詳しく紹介し、続いて安成同機構長が同機構設立の経緯と研究の方向性を概説しました。

続いて、「Ocean - Land - Atmosphere Interactions in Eurasia / Monsoon Asia」、「Role of Vegetation in the Climate System」、「Vegetation Change and Climate Change」の3つのテーマについて、基調講演及び発表が行われました。発表内容は、異なる時間スケール毎に植生-気候相互作用に着目した総合的なものが多く、研究手法としては、大気大循環モデル、領域モデル、動的全球植生モデル、現地観測、年輪解析等がバランス良く織り交ぜられていました。

講演や発表の後、また、休憩時間などには研究者間で活発な議論が行われました。

同会議は、今後も2年に一度の頻度で開催される予定です。



参加者の集合写真

ヨーロッパの高等教育改革に関するセミナーを開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、2月6日(金)、9日(月)の両日、ヨーロッパの高等教育改革に関するセミナーを開催しました。

6日は、同センター客員教授である館 昭 桜美林大学教授を、また、9日は、ファブ・ボネ パリ第10大学教授を招へいし、講演が行われました。

1998年に仏独伊英4カ国の教育相が提案した欧州高等教育圏形成の構想は、1999年のポーニャでの、2010年までにその実現を目指す欧州29カ国による宣言となり、さらにはそれを確実にするため2年に一度の教育相会議をステップとするポーニャ・プロセスへと展開し、今日、拡大

ヨーロッパ的存在となっています。学士3年・修士2年・博士3年の統一学位制度の実現、国家的資格枠組み(NFQ)の実施、質保証標準&ガイドラインの国家的実施、外部質保証システムの確立、質保障への学生関与と国際的参画の実現、ディプロマ・サブプリメントの実施、リスボン認証協定の国家的実施、共通の単位制度ECTSの実施、入学前学習の認定、ジョイント学位の認定といった具体的な施策において、国によってばらつきはあるものの、全体として大きな進展をみせています。

このプロセスには46カ国だけでなく、欧州連合、諮問メンバーとして欧州評議会(CE)、ユネスコ、欧州高等教育質保障協会(ENQA)、非政府組織であるヨーロッパ大学協会(EUA)等の多様な機関が独自の立場から参画している点が注目されます。

高等教育研究センターでは、ほぼ毎月同様のセミナーを実施しています。ぜひご参加下さい(センターHPでご案内しています。<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp>)



6日のセミナーの様子



9日のセミナーの様子

第4回地球教室 ナゴヤで化石をさがそう！

●博物館

博物館は、1月31日(土)、2月1日(日)の2日間、「第4回地球教室～ナゴヤで化石をさがそう!」を開催しました。同教室は、次世代教育の基幹事業として、名古屋市科学館との共催により実施されているもので、今回は約70名の応募があり、抽選により、小中学生17名とその保護者13名の計30名が参加しました。



博物館の標本を手にとって化石の形を覚える参加者

1日目には、学内において事前学習として、同館の標本を用いて石灰岩と化石に関する説明を行ったほか、マガキガイの貝殻を縦と横の二方向で切断してスタンプをつくり、断面を予想しました。また、逆に、あらかじめ準備しておいた巻貝や二枚貝の断面サンプルを観察して立体を想像するクイズも行いました。この事前学習は断面と立体の関係を想像する力を養う練習になっています。

2日目には、はじめに名古屋駅周辺の5カ所で石材中の化石を観察して想像しました。この観察は、前日の事前学習の復習と午後からの現地学習の予習を兼ねています。そして、その後の現地学習では、栄地区に移動して、4カ所のチェックポイントを回るスタンプラリー形式で行いました。各チェックポイントではアンモナイトやベレムナイト、ウミユリといった化石を探してスケッチする課題をこなしました。その後、徒歩で東区東桜の東桜会館へ移動し、事後学習としてジュラ紀の石灰岩の石材を観察して「地球教室」のまとめを行い、好天にも恵まれ好評のうちに終了しました。

「愛知の野鳥 環境と多様性」キャンパス探鳥会、ギャラリートークを開催

●博物館

博物館は、1月31日(土)、日本野鳥の会愛知県支部と共催した企画展「愛知の野鳥 環境と多様性」の関連行事として、日進市との連携により、キャンパス探鳥会とギャラリートークを開催しました。

キャンパス探鳥会では、午前9時半に博物館に集合した参加者が、案内人の引率で、東山キャンパスの東側にある

森に生息する野鳥を双眼鏡で観察しました。本学東山キャンパスには、野鳥にとって都会のオアシスとも呼べる自然が残っており、一年を通じて40種類近くの野鳥を観察することができます。キャンパスに残る地面ではツグミを、常緑の木立ではメジロを、一の谷の林間ではアオジ、アカゲラ、シジュウカラの鳴き声を確認し、残された豊かな自然を体感しました。

探鳥会に引き続き、同館の企画展会場においてギャラリートークが実施され、野鳥の生態写真を前に、野鳥の多様性とその生息環境についての解説が行われました。さらに、企画展で展示してある野鳥の実物の頭骨標本により、野鳥のクチバシの形状と餌との関係などの説明がありました。説明の後、参加者からは活発な質問が寄せられ、盛況のうちに終了しました。



ギャラリートークの様子

『トリのミクロの不思議－トリの羽やホネを電子顕微鏡でみてみよう－』、特別講演会を開催

●博物館

博物館は、1月24日(土)、「トリのミクロの不思議－トリの羽やホネを電子顕微鏡でみてみよう－」を、第16回企画展「愛知の野鳥環境と多様性」の一環として開催しました。

この企画は3部構成で実施され、12名の参加者は、まず博物館講義室で、「トリの骨からみえるもの」と題して、骨を観察する楽しみや、トリが飛ぶために備えた骨の仕組み、トリの祖先等について解説を受けました。引き続き、ニワトリ、ヒクイドリ、アオサギ等などの実物の骨格標本を使って、トリの翼や後肢の骨や頸椎の特徴の説明をうけ

て、各自が手にとり観察しました。最後の実習では、展示場に設置された卓上走査型電子顕微鏡を使い、野鳥の羽の微細構造を観察しました。羽の小羽枝にあるフック構造、騒音を抑えるため新幹線のパンタグラフに応用されたフクロウの翼の初列風切前縁のギザギザ構造や青緑色の金属光沢を持つマガモの翼鏡の板状に変化した小羽枝の電子顕微鏡像を観察し、参加者は自然が造り出す造形の面白さを体感した様子でした。終了後のアンケートでは、全員が「実習は楽しかった」という感想を寄せました。



トリの骨について説明を受ける参加者



講演する高木氏



講演する金沢氏

また、同企画展の開催期間中に、日本野鳥の会のメンバーによる2回の特別講演会を実施しました。12月20日(土)には、高木清和氏が「野鳥を観察する楽しさ」と題して、また、1月10日(土)には、金沢 智氏が「江戸時代 尾張の生物多様性」をテーマに講演を行い、両日とも70名以上が参加しました。

博物館にミニチュアドリームキャリーが寄贈される

●博物館

博物館は、12月25日(木)、アイシン・エイ・ダブリュ株式会社から、ミニチュアドリームキャリーの寄贈を受け、西田和生同社取締役副社長、早瀬正宏同社常務取締役、池田重晴同社ものづくりセンター長をはじめ、末松良一豊田工業高等専門学校長、宮田理事、西川博物館長らの出席のもと、感謝状贈呈式を行いました。

同館が耐震改修工事を終え、昨年5月30日にリニューアル・オープンした際、こけら落とし展示として第10回名古屋大学博物館特別展「今に生きる、からくり人形～ものづくりの源流と尾張文化の継承～」を開催し、尾張文化の代表である「からくり人形」を中心に展示を行った中で、ものづくりの精神を受け継いだ「ドリームキャリー」を披露しました。これは、17世紀後半に出現した茶運び人形の原理を応用したもので、先人の知恵が詰まった道具を現代の技で発展させたものです。



左から、足立教授、早瀬常務、西田副社長、池田センター長、宮田理事、西川館長

この「ドリームキャリー」は、文部科学省、厚生労働省、経済産業省及び国土交通省の4省が連携して実施する内閣総理大臣賞である『第1回ものづくり日本大賞特別賞』を受賞した無動力台車で、今回は、アイシン・エイ・ダブリュ株式会社において実働しているモデルのミニチュア版の寄贈を受けたものです。同館では、来館者に「ものづくりの知恵」について見て、触れて、感じて頂けるよう、このミニチュア版を展示室中央で展示し、動いている様子を映像で紹介するほか、可能な限り実演も行い、次世代教育等にも積極的に利用していく予定です。



弟子の勝利は師の栄光

佐藤 彰一 大学院文学研究科教授

もともとドライな質なのだが、退職にあたってわれながら呆れるくらい感慨というものが湧いてこない。ひとつには、目下進行中のグローバル COE の関係で、三年間特任という形で本学に留まるので、今回はいわば「中締め」というくらいの、軽い区切りのためかも知れない。それでも学部、研究科とは縁が切れ、学生の教育から退くとあれば、教師たるものの懐旧やら後悔やらの感慨にとらわれるのが普通ではなからうか。反芻した挙げ句たどり着いた結論は、こうである。お前はこの22年間好きなように振る舞い、非常識にならない程度に思う存分に揚言してきた。何よりも学者として大事にして貰った。たとえ幾ばくかの心残りがあっても、そのつど帳尻を合わせて来たのだから、積もる感慨などある分けがない。

それでも、冷静に思いをめぐらすならば、胸を去来する事柄は少なからずある。教育、わけても次世代の日本の学界を支えることになる後進の育成が、教育から離れるとなれば大学教師の総括の最重要のトピックであろう。22年前に前任校から名大に移った最大の動機は、学問の後継者を養成するところにあった。手前味噌になるが、このミッションは何とか成就したのではないかと思う。今から千年も前にローマ教皇になったシルヴェステル2世が遺した言葉が、現在の私の心境をよく語ってくれている。曰く「弟子の勝利は師の栄光 Victoria discipulorum, gloria magistris」。



退職にあたって

若尾 祐司 大学院文学研究科教授

名古屋大学で研究の道に入ってから、ちょうど40年になる。法学研究科の修士課程に入学した1969年は大学紛争の年であり、教養部の封鎖や年末には封鎖解除など、大学は大きく揺れ動いていた。研究室に一ヶ月間泊り込んだ記憶が、今も残っている。残念ながら日本の大学紛争は、大学改革にはつながらなかったように思われる。

3年半の大学院生活を終え、復帰後間もない沖縄の琉球大学に赴任した。16年半に及ぶ沖縄生活では、沖縄戦の記憶および米軍基地の重圧のなか、反戦・平和のための行動を常に意識させられた。

ベルリンの壁が崩れた年の春、再び名古屋大学に戻り、文学部教員の生活が始まった。大学構成員の総意で平和憲章が定められており、その将来が楽しみだった。それから20年、

大学院重点化、建物改修、教養教育院など、大学改革・行政業務に追われながら、名古屋大学に本当にお世話になった。研究と教育を続けてくることができたのは、教職員の皆さん、そして学生の皆さんのおかげである。とりわけ若い世代とコミュニケーションできることは、教員という職の特権であると、年齢とともに強く感じた。

この40年間、研究室で仕事をする労働スタイルを、変わりなく続けてきた。このスタイルを、これからどのように変えていけるのか、楽しみにしている。



EdD コースの開設

今津 孝次郎 大学院教育発達科学研究科教授

私の研究は「発達社会学」と「学校臨床社会学」の二つの領域にまたがるが、その歩みについては『人生時間割の社会学』（世界思想社、2008年12月刊）と「学校臨床社会学の構想」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』（2009年3月刊）にそれぞれ詳しく記したので、ここでは1986年に本学に赴任してから23年間の勤務のなかでもっとも印象に残る教育上の経験について記したい。それは我が研究科が2006年4月に高度専門職業人養成としてのEdD（Doctor of Education）コースを日本で初めて開設したことである。

2000年4月の大学院重点化に伴う大学院の多様化として、本研究科も修士課程に高度専門職業人養成コースを開設、博士課程（PhD）に社会人特別選抜も導入して、社会人に向けた大学院教育の開放を開始した。それから6年後に

EdD コースが全国に先駆けて設置された。大学研究者中心のPhDと異なるEdDは英米ではポピュラーで、教育実践者や教育マネジメント担当者などが取得するいわば高度教育職業専門資格であるが、日本ではまだほとんど知られていない。私はEdDコース第1期生の一人を指導した。高校の数学教員で県立高校長を歴任した年輩者である。キャリアアップのためではなく、教師教育に長年携わってきた集大成としての博論作成であった。私は共同研究をするというスタンスで臨み、この3年間お互いに実に大きな収穫があった。全国初のEdD学位第一号がまもなく誕生する。



定年退職にあたって

浦部 法穂 大学院法学研究科教授

2004年4月に名古屋大学に赴任してから早くも5年が経ち、定年を迎えることになりました。東京大学の3年間、神戸大学の33年間とあわせると、41年間を国立大学の教員として過ごしたことになります。年寄りの回顧話は、たいてい「昔は良かった」という話になるのが相場ですが、41年間を振り返っての私の実感も、やはり「昔は良かった」、です。とくに、2004年の「法人化」と法科大学院によって、大学の置かれた状況は厳しさを増しています。この制度改革は、両者とも、抜本的な見直しが必要だと思えます。

制度そのもののあり方もそうですが、より深刻な問題は、この制度改革によって、大学教員・研究者が、それぞれの分野のプロフェッショナルとしての自信やプライドを失ってしまったかのように見えることです。「大学の自治」という言

葉は、いまや「死語」となってしまった感がありますが、この言葉には、各分野のプロ集団としての大学および大学人の誇りと威信が込められていたと思うのです。

旧態依然がいいというつもりはありません。しかし、すぐに役に立つかどうかとか、あるいは、国際的な競争に勝つかどうかなどということには関係なく、各人が、その道のプロとして意味があると確信する研究や教育にうちこむことのできる、そういう大学でありつづけて欲しいと切望します。



名古屋大学での18年

饗場 弘二 大学院理学研究科教授

大学院修了後、京都大学医学部、筑波大学化学系を経て、1991年春に理学部分子生物学科に赴任した。昨今の生命理学におけるハイレベルな教授選のたびに、私の場合はタイミングに恵まれラッキーだったと思う。行き当たりばったりで、大局を見通すことが苦手な私に教授が務まるか不安であったが、名大理学研究科の風土にマッチしたのか、18年間、多くの先輩、同僚、学生に恵まれ、幸せな日々を過ごすことができ感謝で一杯である。至らなかつた点は多々あるが、まずまず良くやったと思っている。大腸菌における遺伝子発現調節という地味なテーマに取り組んできたが、有能なスタッフや大学院生諸君の奮闘で、それなりにインパクトのある成果を発信できたと自負している。また、ここ数年のRNAブームで私達の研究も少しは時流にもマッチしてきたようだ。16名

の博士を始め多数の学生が研究室から育ったことも率直に喜びたい。一方で、基盤的な経費の大幅な減少と格差の拡大など過度の競争原理にリンクした急激な大学の変化には戸惑いを覚えている。私には、まちがいがなく大学院重点化、大学法人化前の大学が合っている。昨年は3名の理学研究科先人のノーベル賞受賞といううれしい出来事に沸いた。これを契機に名古屋大学憲章の中で「自由闊達」という文言が使われることになるようだ。願わくは、このすばらしい学風が物質的、制度的にも裏打ちされた魅力的な名大であってほしい。



定年を迎える

佐藤 修二 大学院理学研究科教授

今年も秋から冬にかけてほんとによい日和が続いた。今日も柔らかい冬の陽が斜めに射している。

家から研究室まで5kmの道を通った。牧野ヶ池を抜けて植田川を渡り東山公園のゆるやかな坂を登る。この峠は植田川と山崎川の分水嶺にあたる。西に鈴鹿や伊吹の山々、北に御岳や木曾の山並みがのぞめる。

四谷側にやや下れば研究室につく。研究室から西の方には、工学部から名古屋市街、名駅ツインタワーがのぞめる。東は樹間に囲まれて大学の研究所の建物が点在する。

今は冬のさ中、すっかり葉を落としたアベマキやコナラは粗い黒い木目を曝して天空に立っている。楠や竹や松は冬に蒼々としている。モチやサカキ類の背の低い雑木林も濃緑の葉をつけて冬の陽を照り返している。所々にヤブツバキの赤

い花が気ままに咲いている。メジロが木々の間を飛ぶ。16年間一春夏秋冬一さ緑、濃緑、黄や紅から褐色そして灰色に移ろう四季、東山の丘陵を歩いた。

めぐる季節の中でもまもなく豊田講堂前にこぶしの白い花も開くだろう。サクラの梢の蕾も少し膨らんだ気がする。新学期が始まる。楠のわき上がるような若緑が新入生を迎える。自分の頭で考え自分の足で歩いてほしい。そして自分の言葉で話しかけてほしい。16年間支えていただいた皆様と大学とに感謝しつつ私も裏山を歩きつづけよう。



“スピン偏極電子ビーム源”に魅せられて

中西 疆 大学院理学研究科教授

思い返せば、スピン物理実験を志した坂田昌一先生にもあこがれて1968年に京大から本学の理学研究科へ入学して以来、大学院生あるいはスタッフとして41年間も研究に明け暮れる生活を送らせていただいた。最初はスピン偏極核子ターゲットの開発とハドロン実験、1980年代からはスピン偏極電子ビーム源の開発に取り組み今日に至った。このテーマは誰の指示でもなく唯々自分の意志で“種から芽を出す”仕事から始めた。それにもかかわらず、学内外の多くの研究者から半導体フォトカソード試作など“芽を育てる水”をいただいた。そのお陰で1991年にはスピン偏極度を従来の40%から86%へと大幅に更新する成果に行き着いた。それ以降も、いま話題の小林・益川理論の先にあるはずと予言される超対称性理論を検証するためのリニアコライダー、次世代・高輝度

放射光加速器（ERL）、さらに最近では、電子顕微鏡に使うためと3種類の偏極電子源の開発に取り組んでいる。それぞれの実用化には“従来技術では達成できないビーム性能”が要求される。“現状を打破できる新手法を考案し手作りの装置でそれを実証してみせる”ことは苦勞でもあり楽しみでもあった。これらの“苦樂”をともしにくれたスタッフ、大学院生、共同研究者、ご支援して下さった皆様方にこの場を借りて厚く感謝申し上げます。



これでいいのだ！

堀 寛 大学院理学研究科教授

私が大学に入学した1964年といえば、最初の新幹線の0系車両が登場した年である。当時6時間以上もかかった東京ー大阪間をわずか3時間半で結んだ夢の超特急。そしてその直後に東京オリンピック開幕。開会式で聖火台に点火した坂井くんは私と同年齢、1945年8月6日生まれ、颯とした陸上選手だった。新幹線の丸い鼻と白い流線型は時代の先端を走る姿そのものであり、オリンピックの成功はその後の自信となった。だがあれから四十数年。さすがの0系も700系という新世代に席を譲り、あの丸鼻さえも、丸まった老人の背のようにみえるから不思議である。私の定年に合わせるようにその役割を終えた。

閑話休題。お世話になった名古屋大学を去る日がついにやってきた。振り返ると6年の助手の時代、6年を空けての

教授の時代、合わせて20年余もの長さである。その間、大腸菌はもちろんのこと、マイコプラズマ、海苔や緑藻、あるいはメダカやチョウ、時にはクラゲやタコまで用いて、生物とそのゲノムの進化、変異とその淘汰、奇妙な擬態の現象などについて、好きなだけ研究させていただけた。有り難いことである。未解決の事柄のいくつかには未練はあるが、どんな時にも『往く人』と『来る人』がいて、それで舞台は回る。とても0系ほどには活躍したわけではないけれど、これでいいのだ。



形成外科を立ち上げて

鳥居 修平 大学院医学系研究科教授

私は1970年に名古屋大学を卒業し、形成外科を志して東京警察病院で研修いたしました。ちょうどその頃マイクロサージャリーによる組織移植が世界で試みられ画期的な効果をあげ、警察病院が世界のトップランナーでありました。そのマイクロサージャリーが私のライフワークになりました。1978年に名古屋大学に戻ってきて31年間お世話になりました。名大病院に形成外科が開設されたのは今から23年前の1986年であり、その頃は東海地方の国公立の大学にはありませんでした。教官1名医員2名と少ないスタッフで診療、教育、研究を行い多くの人に助けられました。マイクロサージャリーは手術用顕微鏡を使って1mm前後の血管を吻合して、切断された指をつないだり、がんやケガで欠損した患者に皮膚や骨を移植して復元します。話題の顔面移植も移植免疫の進歩と

このマイクロサージャリーの技術が必須となります。名古屋大学では頭頸部癌の手術後に食道や下顎骨を作ったり、顔面神経麻痺の再建に主にマイクロサージャリーが行われます。形成外科はQOLが求められる現代ではまだまだ仕事が増えてくると思います。また研究として生命農学研究科の故北川泰雄教授と脂肪由来幹細胞の研究を行い、現在医学部の様々な科で臨床研究が進められております。

名古屋大学は時代に対応して新しい部門、システムを作り、支援してきたと思います。

名古屋大学のさらなる発展を祈念いたします。長い間ありがとうございました。



定年をむかえて

水溪 雅子 医学部保健学科教授

昭和42年に附属病院の看護師として職業生活をスタートして約40年間、社会は激変したが、看護師の機能や教育制度も変化してきた。看護学専攻の教員としての職務は、名古屋大学での看護師教育の変化を推進することでもあった。

約7年間の臨床生活の後、県立看護学校の教員を経て、昭和53年、名大医療技術短期大学部の助手として赴任した。短大の看護学専攻の学生比教員数は、各種学校のそれと大差なかった。その後、私学での教員生活をはさんで3回目の名古屋大学での教員生活は、全国的な国立大学の保健・看護教育の4年制化競争の時期であった。赴任当初からカリキュラム作成等の様々な準備作業に取り組むこととなったが、文部省への申請書類の膨大さと内容の厳しさにびびりながらも国立大学の強みも実感した。保健学科になって10年経過した

現在、博士後期コースまで設置された看護学専攻となっているが、保健医療をめぐる理科系、文科系をつなぐ大学院教育は総合大学の強みのひとつであると実感している。

今後の課題として、保健医療費の増大や人々の人権意識の増大、さらに医療の高度化・複雑化する中で、看護専門職能・機能拡大が検討されているが、こうした状況に対応するためにも総合大学の強みが生かされるものと期待している。

最後に、これまで無事に名古屋大学で定年を迎えられることは、関係する皆様の支援のおかげでもあり、お礼を申し上げます。



定年を迎えるにあたって

長瀬 文彦 医学部保健学科教授

学生時代から含めて45年間名古屋大学にお世話になった。終戦の年に生まれ、東京オリンピックの年に大学に入り、高度経済成長期を過ごし、やがてバブル期を迎え、ソ連も崩壊した。激動の時代であった。昭和61年私は名古屋大学医療技術短期大学部衛生技術学科に教授として赴任し、免疫学の教育に従事した。ここでは教育が中心で、研究設備としては学生の実習室しかなかった。当時、医療短大を4年制化することが念願であったが、平成9年に保健学科が創設され、翌年から学生を迎えた。私も衛生技術学科および保健学科検査技術科学専攻の主任として保健学科の創設および立ち上げに尽くした。現在は大学院制度も整い、建物も新築され、いよいよこれからの発展が期待される。これらの改革は臨床検査技師にとって光栄なことであり、このような時代に立ち会えた

ことを幸運に思う。私は工学部を卒業したが昭和49年に医学部の大学院生として細菌学教室で免疫学の研究をはじめた。当時、免疫学は黎明期であり、多くの学説が飛び交い、未知な事柄に満ちていた。ところが、免疫学はこの30~40年の間に飛躍的に発展し、今や医学生物学において主要な学問の一つとなった。このような時代に免疫学の研究に従事できて楽しかった。定年退職にあたり元名古屋大学総長加藤延夫先生、前免疫学講座教授中島泉先生はじめお世話になった皆様に深く感謝致します。



安全と信頼

飯田 孝夫 大学院工学研究科教授

最近、「安全と安心」という言葉をよく目や耳にします。科学技術や社会のシステムに対する信頼の揺らぎが背景にあります。しかし、規制や罰則の強化に基づいた安心ではなく、信頼に基づいた安心感の醸成に努めるべきです。

工学研究科の放射線取扱主任者を10年以上担当してきました。学内の安全保障委員会委員や原子力委員会委員長として、大学内の放射線安全の確保にも努力してきました。約10年前のことです。工学部の放射線管理室に住宅建設関係者から電話がありました。名古屋大学の敷地境界近くに新築された住宅の購入希望者から、大学からの放射線の影響についての質問を受けているので、説明を求める内容でした。大学内の放射線利用の現状、敷地境界での年間最大被曝線量の見積もり、放射線の健康影響について説明をしました。原子力発

電所や核関連施設のような大型施設だけが周辺住民の反対運動を受けると思いがちです。社会に有益な研究を行っているとの意識があっても、大学の周辺住民に影響のある事故を起こせば問題は顕在化します。このような問題は化学物質、バイオ、騒音等にも当てはまります。外部に危険な物質等を放出する可能性のある施設は、大学の敷地の端ではなく、できるだけ中央に設置すべきです。地域住民との問題の発生を避けるためには、日常的に緊密なコミュニケーションを取り、信頼のある関係の構築に心がける必要があります。



変化の速い時代に勤めて

澤木 宣彦 大学院工学研究科教授

名古屋大学に助手の職を得た1973年は昭和30年代に始まった日本の高度経済成長期にあつて、大学が膨張を続けているときでした。それから20年を待たずに、日本経済は歴史的な経済危機に見舞われ、大学は設置基準の大綱化、教養部廃止、大学院重点化と矢継ぎ早に変革を迫られ、そして極めつけの独立法人化の時代を迎え、大競争時代に突入しました。省みれば、このような変化の速い時代にも、目標を見失わず、毎年入れ替わる若い学生諸君と夢を追いかけてながら勝手気ままな研究生生活を愉しむことができましたことに、ただただ感謝するばかりです。また、卒業生諸氏が、それぞれに活躍する場所を得て、社会の豊かさのために貢献されている姿に接するにつけ、名古屋大学を卒業されたからこそと、改めて、母校名古屋大学の存在意義を確認している次第です。

私が専門とした半導体工学は1948年のトランジスタの発明に端を発していますが、私の人生はまさにこの半導体工学の成長と同期していました。この発展と共に生きることができたのは真に幸いでしたが、来るべき科学技術は、地球上の全ての民族が等しく安心と安全、そして豊かさを享受できる社会の構築に貢献しなければなりません。自然に恵まれた濃尾平野に位置し自由闊達を旨とする名古屋大学が今後も新しい科学技術開拓の中核となることを確信しております。



定年に際して

綱島 滋 大学院工学研究科教授

1964年に工学部入学以来、学生および教員として計45年間名古屋大学で過ごしました。卒業研究と大学院では磁性薄膜メモリに関する研究をしておりましたが、半導体集積回路メモリの登場によってこの研究は終わりをづけ、1970年代の後半からは、光ストレージの時代だとの思いから、光磁気記録材料の研究を始めました。1980年代になると、光磁気記録に参入しようとする企業が多くなり、電気機器メーカーから化学関連企業まで、いくつかの企業と共同研究をしました。光磁気記録に関する研究はかなり長く続き、2000年には名古屋で国際会議を開催しました。しかし、21世紀にはいと競合技術に行く手を阻まれ、研究の中心はMRAM（磁気ランダムアクセスメモリ）などに関連した微細加工膜に移り、その研究なかばで定年を迎えました。研究テーマの変遷はありまし

たが、扱う材料は40年余の間、一貫して磁性薄膜でした。アモルファス膜、人工格子膜（多層膜）、微細加工膜など多様な磁性薄膜を研究してきました。なかでも、希土類-鉄属アモルファス膜の熱磁気記録ならびに磁気光学効果に関する研究が最もまとまったものかと思えます。何はともあれ、定年まで研究と教育を楽しく続けることができました。これは工学部・工学研究科電気系の先輩・同輩・後輩をはじめとする関係皆様のお陰と深く感謝致しております。



“一応、研究職です”

村松 直樹 大学院工学研究科教授

企業から転職して束の間の5年でした。当時は、もうひと仕事、本来の研究ができるだろうと期待しました。間もなく、“一応、研究職ですか”と答えるようになりました。確か2年ほど前、“東大生はなぜ「一応、東大です」と言うのか？”という本が店頭に並びました。読んでないので詳細は分かりませんが、この場合の“一応”は本来の意味以上の含みがあるのでしょうか。しかし私のそれは、おおよそとか概略の意で、むしろ“強いて言えば”の感じでは

“雑用”の多さは想定外でした。過剰の上に長過ぎる会議、通年行事化した入試、素人から成る各種委員会など挙げたらきりがありません。毎年ほとんど同じ議題に、何故、結果が5年間程度ルーチン化されないのでしょうか。入試は、大学院向けなども含めると年中です。一括、外部委託したら問題な

のでしょうか。

研究に割ける時間割合は、下層から順に、“七五三”と揶揄されているようです。教授層の余りに少ない実態は国レベルの損失のように思われます。自由独立の名の下に払う代償の大きさを認識すべきでしょう。

ノーベル物理学賞を受賞された益川、小林両先生の受賞対象業績が京大助手時代のものだったことは記憶に新しいところですが。これは、若さ故のみならず、研究時間の多さが多分に関係していたように思われます。

何はともあれ、大学という“異文化圏”を体験できたことは興味深く幸運でした。関係者に感謝申し上げます。



森の生きものとともに

柴田 勲 大学院生命農学研究科教授

私は1992年に農学部附属演習林教授として公立研究機関の研究者から農学部へ赴任しました。私にとっては初めての大学勤務だったので大学での生活はすべてが新鮮でした。それから16年6ヶ月が経ち定年退職を迎えることができました。ここまで仕事が遂行できたのは研究室と演習林のスタッフ、また院生や学生の皆様のおかげだと感謝しています。

大学では優秀な学生や院生たちと仕事をすることができました。今までも森林に生息している昆虫や動物を対象に研究をすすめてきたのですが、これまでできなかったことが彼らの新しい発想で解決することができたのは新しい喜びでした。紀伊半島に位置する大台ヶ原をフィールドに野外研究をすすめてきました。野外調査は労力がかかり成果もあまりにくいものですが、森林での生物間相互作用に関して新しい知

見も得ることができました。当たり前のことかも知れませんが、森林で生活している植物や動物はお互いに関係し、影響しながら生きているということを実証することができました。希少価値の種を保存することも大事ですが、こうした生物間相互関係は生物多様性を守るうえで重要なものであると認識するようになりました。里山問題も話題になりますが、人間も含めたそうした関係の認識が解決に役立つものと思います。こうした意味で2010年に名古屋で開催される第10回生物多様性条約締約国会議の行方に大変興味をもっています。

国立大学が独立法人になったので演習林も民有林となりました。民有林化とともに演習林の管理方法もこれからは変わっていくことが予想され、今後の課題となるでしょう。最後に名古屋大学のますますのご発展を祈っています。



名古屋大学での生活を振り返って

竹谷 裕之 大学院生命農学研究科教授

名古屋大学教員として研究・教育・管理に35年間向き合えたことにまず感謝したい。専門は農業経済学であるが、東海地域に向き合うと、農地価格高騰に伴う近郊農業再編や、自動車産業による農村労働力包摂と兼業農業再編など、次々と面白くて重要なテーマが見つかった。日本経済の国際化とともに私の研究も途上国に広がった。スーダンの砂漠化を引き起こす機械化農法を見つめ、中国の農業技術契約普及方式の評価、バングラデシュのグラミンバンクと農民能力形成など、農業改革と貧困緩和に向けた研究に取り組んだ。近年は農業廃プラスチックのリサイクル問題を日中韓で追いかける毎日である。生命農学研究科の出口の複数化に向け農学国際教育協力センターづくりを要請され、センター長も務めたが、国際的期待が強まるなか、さらにプレゼンスを高めるよ

う応援したい。

教育では食糧生産管理学や農業政策学、地域資源管理論などを教えたが、最近競争社会の厳しさからか、社会の有り様を問うよりも適応することに意を注ぐ学生が増えたのが気がかりである。管理では、技術専門官制度への対応が求められる中、全学技術支援センターづくりに関わったことが印象深い。この取り組みは、仕組みづくりと自発性の引き出しの重要性を教えてくれた。大学を取り巻く環境は厳しさを増すと思うが、全構成員が協力して「自由闊達な気風」を活力に、名大の研究教育が発展することを願っている。



節目に思い出すこと、思うこと

並河 鷹夫 大学院生命農学研究科教授

入学からの45年間、名古屋大学でお世話になった。先達、諸賢の先導のお陰で、最初の30年間は「やりたいこと」をやり、後の15年間は「しなければならぬこと」もした。後の15年間には身に余る仕事も戴き、新規な大学の課題が多く、勉強すべきことが多すぎて腹の痛くなるような時もあった。しかし、この遅蒔きの勉強が今なお私の一番の糧になっていることに大変感謝している。

先日、瀬戸内寂庵さんがTV番組で「貧しかった戦後を含めても、これほどの閉塞感を感じる時代はない、一学生達が静かなのは寂しい」と話していた。1960-75年頃、迫力のある(?)学園紛争、妥協を許さぬ(?)学生運動が続いた。当時の田中角栄首相が国会を取り巻く若者学生達を眺めて「彼らが日本の将来を担うのだ」と言ったという(数年前、

角栄さんの懐刀であったSH氏がTV番組で語っていた)。他方、当時の研究室教授が大学の喧騒ぶりをみて「結局のところ、教授に“実力”がないだね」と言ったのを思い出す。この誠実な教授はタスキ掛けでデモに行き(行かされ?)、帰りに「風呂に入りにくるか」と言ってくれた。昨今の社会状況にも拘らず、学生、大学が静かなようにみえる。学生達を黙らせるような“実力”が教授や大学についていたのであろうか――。



定年退職を迎えて

服部 一三 大学院生命農学研究科教授

名古屋大学に入学して45年、助手になって35年、これまで長い間多くの人たちに支えられ、平成21年3月で定年退職となります。この間、環境専門委員会や緑化ワーキンググループの一員として、名古屋大学全体の緑化のあり方、風致地区に属する部分の緑地の保全など、いろいろな場面で大学運営の小さな部分でも担うことができたのは、ひとえに多くの方々のおかげでできたものと感謝いたします。また、留学生の増加に伴い、組織培養法の修得を求めるものが多く、様々な植物種を供試して、培養から再分化系の一連の流れを見通せるようになりました。このようなことを行ってきて中で、多くの人たちの協力を得て、自分の考えた実験の流れを進めて来られたことが小生のつたない研究生生活を支えてきたものと確信しています。

これからの大学には、これまで考えられなかったような、厳しい状況が続いていくものと思われませんが、自分自身の考えを持ち、特に農学部・生命農学研究科のような応用を目指した場面では、自分の出口を切り開いてほしいと思います。そうすることで、自ずと、方向性も定まり、実りある研究生生活を送ることができるものと確信します。



名古屋大学の良さを再発見したい

貝沼 洵 大学院環境学研究科教授

名古屋大学在職29年間、学生・大学院生時代の11年間も含めると40年間になります。職場も教養部から文学部、情報文化学部、環境学研究科へと、名古屋大学の東山キャンパスも広いとはいえ、世間からすれば、よくも狭いところでコチョコチョと移動したものです。けれども、東山キャンパスがまだ緑も少なく赤土がむき出しの道路だったこと、そしてなによりも70年代初頭の学園紛争——名古屋大学でも本部棟や教養部棟が封鎖され、大学の「自治」と「民主化」をめぐる「政治の季節」があったこと——を記憶にとどめている最後の世代かもしれません。

率直に言って、その頃を振り返ってみると、名古屋大学は良くなったのだろうか、と漠然とした不安にかられることがあります。立ち足かかる「教授会の自治」＝「学部自治」の

「壁」に対して若い頃に募らせていた不満や閉塞感に比べてみると、「法人化」後の閉塞感のほうがはるかに厳しい。その重苦しさは半端ではない。もちろん、この閉塞感、大学の現状からだけではなく、より深く時代から由来するものでしょう。しかし、不見識ではありますが、定年を迎えて正直ホッとしています。あまりに長く名古屋大学とつき合えずたというのが実感です。定年を機会に精神的にできる限り名古屋大学から離れて、名古屋大学の良さを再発見したいと思います。長い間、本当にお世話になりました。



定年の日、感慨深く

星野 光雄 大学院環境学研究科教授

理学部入学から数えて何と45年も名古屋大学にお世話になった。この間のさまざまな出来事と多くの人との出会いのすべてが感慨深い。なかでも、1992-1993年の教養部廃止と人間情報学研究科・情報文化学部の新設は、私にとって教育研究上の大きな転換点となった。そこからの潮流はさらに2001年の環境学研究科の新設へと続いた。このような流れの中で、私自身としては地球科学から環境科学への新展開が必然であったし、そのことへのためらいはまったくなかった。大学の中で、異質な学問分野に堂々と挑戦できる機会を与えられたことはむしろ幸運であったと受け止めている。

ケニアをフィールドとした砂漠化・土壌浸食研究、シリアをフィールドとして推進中の自然環境変遷史研究では、気心の知れた研究者と調査隊を組織でき、海外調査にどっぷりと

浸かることができた。一生行くことはないだろうと思っていたメソポタミアの地、ユーフラテス河沿いに佇む遺跡、多くの考古学者・環境科学者との出会い、これらの一つ一つは私にとっての貴重な体験である。学生との野外巡検や野外調査指導も数え切れない。これらも大変楽しい思い出である。

本当に長い間お世話になりました。名古屋大学の益々の発展を心よりお祈りします。



信なくば立たず

加藤 貞通 大学院国際言語文化研究科教授

久しぶりに『カッコウの巣の上で』を見た。名古屋大学に赴任（1975年4月）後3年目に在外研究員として米国東部の大学に留学していた頃、大学近くの映画館で何度も見た映画である。聴覚障害を装った巨漢、通称チーフが、精神病院の窓に大穴を開けて薄明の原野に向かって脱出するエンディングでは、観客席から大きなよめきが湧き上がり、スクリーン内の患者たちの歓声と重なり、内外が一体化するようだったことを思い出す。31年ほど経て映画は以前より複雑に見えた。始めは、自由の風を病院に吹き込む主人公に肩入れしつつ見ていたが、やがて、ひょっとしたら自分にも、権力をバックに患者を徹底管理し、科学的セラピーと称して弱者をいじめ自殺に追いこむパワハラを権化・看護婦長に近い要素が、潜んでいるかもしれないとの思いが浮上した。

我々は被害者、加害者、両方でありえる。大学に「市場原理」を未消化のまま取り込む風潮の中で、学生や専門的教育研究者を機械の部品のように交換容易なモノとして扱ってはいないか、権限や影響力を濫用し自由や権利を軽んじてはいないか、脅迫の正否より組織存続が優先だ等の言説、数の暴力、言語道断な産学連携運営、アパシーまたはハラズメント宣言無視が蔓延する部局はないか、反省が望まれる。目先の利益に囚われた挙句、カッコウに托卵された鳥の巣同然となり信頼の絆が綻びれば、大学の存在理由も自治も内側からの崩壊が危惧される。



偶然の有効利用

小坂 光一 大学院国際言語文化研究科教授

中学生のとき、国文法の授業が面白くて仕方なかった。この国語の先生との偶然の出会いが言語学の道に繋がったと言える。話せば長くなるので、一切を省略するが、大学でドイツ語学を専攻したのも偶然の結果だ。何しろ、入学してすぐの第1回目の授業ではフランス語のクラスにいたのだから。ある偶然からドイツ語に変更した。その後、英文科に進学したが満足できず、ドイツ語学に転専攻。ある先生との偶然の出会いが私の進路を変えたのだ。さらに、秋田県生まれの私が故郷から遠く離れた名古屋大学の大学院に入ったのは偶然が何重にも重なった結果だった。このように、人生は偶然の積み重ねだ。だとすれば、真の実力というのは「偶然を有効に利用できる力」だと言えるのではないだろうか。

のものだった。本当に皆様のお世話になった。特に事務の人たちには、問題視されても不思議でないくらいよく面倒を見てもらった。何でもやってもらえた。また、教養教育院の専任教員を「兼務」することにより、他部局の多くの先生と懇意になれたことも財産の一つだ。しかし、反面教師でしかあり得ない私が38年間という長い時間を大過なく過ごしてこられたのはとりわけ学生に恵まれていたからに他ならない。結局彼らは私の「生涯の財産」となった。今、38年分のすべての受講者名簿を大事に携えて大学を去る。皆様に心から感謝しつつ……。

38年間の教師生活（名大では29年間）は人間との出会いそ



母校奉職12年：感謝と夢と

末永 康仁 大学院情報科学研究科教授

終戦の3か月後に犬山で生まれ木工好き少年から現在にいたるまでの過程は、全て様々な方々にお世話頂いたことの集積です。恩師、友人、全ての方々に心から御礼申し上げます。本学電気の博士課程を修了し、東京と横須賀のNTT研究所に24年間勤務した後に、約12年間母校に奉職する機会を頂きました。院生時代は胸部X線写真の自動診断、NTTでは主に人物像の認識生成、大学に戻ってからは主に医用画像処理と、一貫して画像処理の研究に従事してきました。過去41年間、計算機の劇的な性能向上を実体験してきた世代ですが、マシンの性能向上で解決される課題とそうでない課題とがあり、「温故知新」は今後に何をなすべきかを考える助けになることを実感しています。振り返れば一瞬の大学12年、21世紀COE拠点リーダー担当など忙しいながらも若手を

育成する喜びを糧に仕事に取り組んで来ました。私の信条「人間は大自然のほんの一部」、「物質的豊かさより精神的豊かさを」にも若い皆さんが結構耳を傾けて下さったのは幸でした。

最後に夢を一言。本来の壮大な精神に基づく豊田講堂前からキャンパス西端までの広大な芝生広場の復活を夢見ます。昔は何面ものソフトボール場として人が溢れ名古屋市街を見渡す広い視界がありました。視界は精神・思想に影響します。当時の本学に溢れていた何ともいえないぬぐ々感・開放感を、いつか何らかの方法で、再実現して頂けると幸いです。



メダカ畑で過ごした日々

若松 佑子 生物機能開発利用研究センター教授

1994年4月、名古屋大学に着任した私と夫の尾里建二郎の目にまず飛び込んできたのは、研究棟の周囲を埋め尽くす蘘、蘘、蘘の海でした。前任の富田英夫先生が研究者人生をかけて収集されたメダカの自然突然変異体数万尾がこれらの蘘の中にいました。このメダカを「何とかしてくれ!」、これが私達に与えられた課題でした。メダカの整理を担当した私は、学生達が「メダカ畑」と呼ぶこの蘘の海で、富田先生が残されたメモを頼りにメダカを一つ一つ観察し、確認してゆきました。そして、どれもこれもそれぞれに興味深い変異体であることを理解しました。変異形質はそれぞれ少なくとも一つの遺伝子につながっています。形質は遺伝子が咲かせた花です。このメダカ畑はメダカの遺伝子のお花畑だったのです。私はこの宝物を捨ててなるものかと思い、すべて

の系統を保存することに決めました。そして、研究室のスタッフや学生達の協力を得て、二年半をかけてこのメダカ畑を建て直しました。メダカのゲノムが解明された今日、これらの系統は日本が誇る生物遺伝資源として世界中で活躍しています。名古屋大学を去るに当たり、これらの日々を懐かしく思い出すと同時に、この宝物を大学に、そして日本に残せたことを誇りに思います。また、この活動に協力して下さった研究室のスタッフや学生の皆さん、そして、深い理解をもって暖かく見守って下さった名古屋大学にお礼を申し上げます。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成21年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
1 平成21年「春季証券投資セミナー」2月1日開催：家森信善・経済学研究科教授 「社会人になる前に知っておきたい経済の知識」 大学生対象の就職支援セミナー	1.16 (金) 1.28 (水)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
2 NPO 法人「ミレニアム・プロミス・ジャパン」名古屋支部第1回研究会 24日開催：山田肖子・国際開発研究科准教授 「アフリカのいまを知ろう」	1.16 (金) 1.24 (土)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
3 早稲田大学集中公開講座 MAJESTY's BOOT CAMP in 東海～科学技術ジャーナリズムを考える2日間～2月10、11日開催：篠原久典・理学研究科教授が公開講義「ナノテク報道を考える」を行う	1.16 (金)	中日 (朝刊)
4 福和伸夫・環境学研究科教授らの研究グループが、「バス停」の名前が、地震の被害を左右する地盤の良しあしの身近な判断材料になることを突き止める	1.16 (金)	朝日 (夕刊)
5 ～地域密着型金融を通じた中小企業金融の円滑化～16日開催：家森信善・経済学研究科教授がパネリストで参加	1.17 (土)	中日 (朝刊)
6 国際シンポジウム「オバマの米国 世界どう変わる」16日開催：春名幹男・国際言語文化研究科教授らがパネル討論	1.17 (土) 1.20 (火)	中日 (朝刊)
7 大学入試センター試験始まる	1.17 (土) 1.18 (日)	読売 他4社 中日 (朝刊) 読売
8 人・模・様：石垣武男・本学名誉教授は40年以上の演奏経験を持つバンジョーが得意	1.17 (土)	毎日 (夕刊)
9 第13回1・17震災フォーラムー阪神大震災を私たちのまちで繰り返さないためにー17日開催：田所敬一・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授 「身近な活断層とその地震災害」	1.18 (日)	中日 (朝刊)
10 京都産業大学教授・益川敏英・本学特別招へい教授、高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・同特別招へい教授とボストン大学名誉教授・下村脩・同特別招へい教授が愛知県から学術顕彰、名古屋市から学術表彰を授与される	1.20 (火) 2. 7 (土)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊) 他2社
11 名大サロンの主役：伊藤繁・理学研究科教授 光合成の進化解明に光	1.20 (火)	中日 (朝刊)
12 訃報：松井秀治・本学名誉教授	1.20 (火) 1.21 (水)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
13 本学は工学研究科附属複合材工学研究センターを新設し、三菱重工業株式会社が開発する国産旅客機「MRJ」を技術面で支援	1.21 (水) 1.27 (火) 2. 3 (火)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊) 中日 (朝刊) 他2社
14 風向計：家森信善・経済学研究科教授 若者の雇用不安に配慮を	1.21 (水)	読売
15 華麗なる王朝絵巻「源氏物語」の世界 2月12日、19日開催：高橋亨・文学研究科教授が講師	1.21 (水)	毎日 (朝刊)
16 春名幹男・国際言語文化研究科教授がオバマ大統領の就任演説について話す	1.21 (水)	中日 (夕刊)
17 家森信善・経済学研究科教授は「今回の不況では、日本でもっとも国際競争力のある自動車産業や工作機械産業がダメージを受けている。苦しい時期ではあるが東海地域の強みを生かし、将来に向けて環境投資の技術開発を進めべきだ」と話す	1.22 (木)	中日 (朝刊)
18 書籍：「目からウロコの縄文文化ー日本文化の基層を探るー」：渡邊誠・本学名誉教授著	1.22 (木)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成21年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
19 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授は、全国学力テストの開示方法について「文部科学省の実施要領を破る自治体も出てきている。違反が予想される自治体をテストに参加させることは筋が通らず、全員参加型の学力テストを今後も続けることについて考える必要があるのではないか」と話す	1.22 (木)	中日 (朝刊)
20 近藤孝男・理学研究科教授らの研究グループは、「体内時計」について微生物が周囲の温度変化で時刻を調整していることを突き止める	1.22 (木) 2. 5 (木)	日経 (夕刊) 中日 (朝刊)
21 瀧口金吾・理学研究科助教と瀧口陽子・同研究科技術補佐員らの研究グループは、細胞骨格と呼ばれる「セブチン」が細胞形状を変形させる機能を持つことを突き止める	1.23 (金) 1.24 (土)	中日 (朝刊) 日刊工業 読売
22 株式会社日経 BP コンサルティングがインターネットを通じて、愛知、静岡、岐阜、三重にある主要48大学の認知度や学生のイメージなどについて分析 その結果本学が認知度98.2%で1位	1.23 (金)	日経 (朝刊)
23 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は「朝日賞『日本の文化、社会の発展』に貢献した人々に贈られる。これからも科学者や芸術家を勇気づける存在であって欲しい」と話す	1.24 (土)	朝日 (朝刊)
24 オンラインで検索可能になった「歴史写真アーカイブ アジア・戦前戦中編」の中から、西澤泰彦・環境学研究科准教授が日中戦争の象徴的な光景が撮された1枚を紹介	1.24 (土)	朝日 (朝刊)
25 ガーナ共和国のチャールズ・ブレンボンイエボア大使が留学経験のある本学を来訪	1.24 (土)	中日 (朝刊)
26 中日健康セミナー楽しい生活は健康から～自分で管理する健康づくり～2月21日開催：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 「生涯健康をめざして～40代からを元気に生きるために今できること～」	1.24 (土) 2. 2 (月)	中日 (朝刊)
27 再生医療で歯とお肌の若返り～日帰りインプラント治療のご紹介～2月1日開催：上田実・医学系研究科教授「再生医療技術を用いた歯槽骨再生治療としわ治療」	1.24 (土)	中日 (朝刊)
28 立川幸治・医学部附属病院教授が、日本創生委員会の懸賞論文「100年後にむけての日本又は日本人はどうあるべきか」で優秀賞を受賞	1.24 (土)	中日 (夕刊)
29 本学と理化学研究所は細胞の運動などを担っている「アクチン」の構造を解明	1.26 (月)	朝日 (朝刊)
30 宇宙航空研究開発機構がノルウェー北部アンドーヤ基地から小型観測ロケットを打ち上げ、オーロラ現象と大気の運動観測実験に成功 本学や東京大学などの研究者が参加	1.27 (火)	日刊工業
31 頑張れ名古屋勢 名岐駅伝チーム紹介：本学は32回目の出場	1.27 (火)	中日 (朝刊)
32 糖尿病・手足のしびれとその治療について3月21日開催：服部直樹・医学部附属病院助教 「手足のしびれと病気について」－しびれの正体をつきとめ、いかに対処するかを考える－	1.28 (水)	中日 (朝刊)
33 最新宇宙論に挑戦！～宇宙の始まり、果てを見る！2月8日開催：杉山直・理学研究科教授が最新宇宙論を解説	1.28 (水)	毎日 (朝刊)
34 極夜を彩る神秘的な光「オーロラ」2月14日開催：藤井良一・太陽地球環境研究所長 「太陽と地球の関係、地球の持つ磁場の役割とオーロラについて」	1.28 (水)	毎日 (朝刊)
35 創造の地：多和田真・経済学研究科教授にもづくり拠点の今後向かうべき方向性などについて聞く (上)	1.28 (水)	日経 (朝刊)
36 作家と研究者のグループ「メディアセレクト」を主宰する茂登山清文・情報科学研究科准教授は、愛知県児童総合センターで開催されているメディアアート展について「ここはパブリックスペースのため作品が目当ての来館者は極めて少なく、作家にとって現実の世界に作品を放り出す試練の場になる」と話す	1.28 (水)	朝日 (夕刊)
37 医学系研究科長に祖父江元・同研究科副研究科長を選出 任期は4月1日から3年間	1.29 (木)	朝日 (朝刊)
38 京都大学附置研究所・センター第4回シンポジウム「京都からの提言～21世紀の日本を考える」3月14日開催：山脇幸一・理学研究科教授らがパネル討論	1.29 (木)	読売
39 景気後退を受け就職先として安定している公務員に人気が集まる中、本学で行われた国家公務員一種試験合格者の官僚を招いた就職ガイダンスには、前年比8割増の約220人が参加	1.29 (木)	日経 (朝刊)
40 創立70周年を迎える本学を紹介 「次代を担う若者育て70年を数える 名古屋大学」	1.30 (金)	毎日 (朝刊)
41 高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・本学特別招へい教授が、政府の教育再生懇談会の委員に内定	1.30 (金)	毎日 (夕刊)
42 西村真・経済学研究科教授は事務職の求人倍率が0.26倍と落ち込んでいることについて、「ビジネスがグローバル化する中で事務職などはより一層能力を磨かざるを得ない。スキルと共に精神力も必要となり、学生が課題を解決する力を身につけられる教育機関が求められる」と話す	1.31 (土)	日経 (朝刊)
43 京都産業大学教授・益川敏英・本学特別招へい教授が自らの戦争体験を話す	1.31 (土)	朝日 (夕刊)
44 2008年ノーベル物理学賞受賞記念名古屋大学レクチャー 宇宙と物質の根源「対称性の破れ」のかなたに 7日開催：山脇幸一・理学研究科教授 「素粒子とは」、杉山直・同研究科教授 「宇宙進化の謎と素粒子」、高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・本学特別招へい教授 「CP対称性の破れと素粒子の模型」、京都産業大学教授・益川敏英・同特別招へい教授 「CP対称性の破れが我々に語ったこと」	2. 1 (日) 2. 7 (土) 2. 8 (日) 2.11 (水)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊) 他3社 中日 (朝刊)
45 わが家を強く：福和伸夫・環境学研究科教授 筋交い通常の倍以上	2. 1 (日)	中日 (朝刊)
46 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 素顔のイラン	2. 1 (日)	中日 (朝刊)
47 青少年耐震まちづくり講師養成講座 2月17日～3月3日まで6回開講：護 雅史・環境学研究科准教授が模擬授業を行う	2. 1 (日)	中日 (朝刊)
48 名古屋科学館の企画展「小林・益川・下村ノーベル賞展」3月8日まで開催：「小林・益川理論」「緑色蛍光たんぱく質 (GFP)」の解説や実際に使われた実験器具などが展示される	2. 1 (日) 2. 3 (火)	中日 (朝刊)
49 第63回名岐駅伝競走大会1日開催：本学チームは一般の部で10位 念願の入賞を果たす	2. 2 (月)	中日 (朝刊)
50 国際シンポジウム「低炭素型都市をつくる－科学と政策の架け橋－」16日開催、国際ワークショップ「低炭素型都市の実現に向けて－国際共同研究と連携強化－」17、18日開催	2. 2 (月)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成21年1月16日～2月15日]

記事	年月日	新聞等名
51 マイナス80：竹内恒夫・環境学研究科教授 エコ20年 1	2. 2 (月)	中日 (朝刊)
52 高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・本学特別招へい教授が同研究機構より特別栄誉教授の称号を授与される	2. 2 (月)	日経 (朝刊)
53 本学は株式会社岐阜銀行の社内ベンチャー「ジーベック」と産学連携協定を締結	2. 4 (水)	中日 (朝刊)
54 時のおもり：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 ゴキブリが益虫になる	2. 4 (水)	中日 (朝刊)
55 訃報：神谷功・本学名誉教授	2. 4 (水)	中日 (朝刊) 他4社
	2. 5 (木)	中日 (朝刊)
56 第23回国際経済政策研究センター・キタン国際学術シンポジウムものづくり経営における英知6日開催：木村彰吾・経済学研究科教授がパネリストとして参加	2. 4 (水)	中日 (朝刊)
57 森川高行・環境学研究科教授と株式会社デンソーなど6企業・団体が国の支援を受けて、次世代型カーナビゲーションシステム「PRO-ROUTE」の開発を進める	2. 4 (水)	朝日 (夕刊)
58 国立大学二次試験出願状況 本学は5140人で3.0倍	2. 5 (木)	毎日 (朝刊) 他4社
59 名古屋よりエコ事業所として認定されている本学は、特に顕著な取り組みをしたとして「エコ事業所優秀賞」を受賞	2. 5 (木)	中日 (朝刊)
60 医学部附属病院小児科医局が「私と小児科の先生」をテーマに原稿を募集したところ82作品が集まる 企画をした小島勢二・医学系研究科教授は「私たちの仕事を理解して感謝してくれる人も多いはず。そうした声を聞いて、特に若い医師に小児科医としてのやりがいを感じてほしい」と話す	2. 6 (金)	朝日 (朝刊)
61 天文学講演会 南天に広がれ宇宙ロマン15 特定領域研究「サブミリ波の宇宙」成果報告講演会11日開催：福井康雄・理学研究科教授、大西利和・同研究科准教授が講演	2. 6 (金)	中日 (朝刊)
62 本学は、ノーベル賞を受賞した京都産業大学教授・益川敏英・本学特別招へい教授、高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・同特別招へい教授、ボストン大学名誉教授・下村脩・同特別招へい教授の業績をたたえ、資料館の開設準備と共に周辺歩道の整備を始める	2. 6 (金)	中日 (夕刊) 東京 (夕刊)
63 京都産業大学教授・益川敏英・本学特別招へい教授が名古屋市立向陽高等学校を訪問 高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・同特別招へい教授は愛知県立明和高等学校を訪問し、それぞれの出身高校で講演をする	2. 6 (金) 2. 7 (土)	朝日 (夕刊) 中日 (朝刊) 他4社
64 小林・益川両先生ノーベル物理学賞受賞記念シンポジウム 小林・益川理論とその検証21日開催：高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・本学特別招へい教授がパネリストとして参加	2. 7 (土)	毎日 (朝刊)
65 叙位叙勲：従四位 松井秀治・本学名誉教授	2. 7 (土)	中日 (朝刊)
66 名古屋第二赤十字病院に入院中の患者が臓器移植法に基づく脳死と判定され、移植手術が実施される 医学部附属病院では40代男性に肝臓を移植	2. 9 (月)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊)
67 京都産業大学教授・益川敏英・本学特別招へい教授と高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・同特別招へい教授が、ノーベル賞受賞決定からの4ヶ月を振り返り中日新聞のインタビューに応える	2. 9 (月)	中日 (夕刊)
68 京都産業大学教授・益川敏英・本学特別招へい教授と高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・同特別招へい教授が名古屋市科学館を訪れ、小学生から高校生までの約70人と交流	2.10 (火)	中日 (朝刊) 読売
69 ノーベル賞受賞記念講演会【物理学賞】3月11日開催：高エネルギー加速器研究機構名誉教授・小林誠・本学特別招へい教授 「6元クォーク模型誕生のころ」、京都産業大学教授・益川敏英・同特別招へい教授 「科学とロマン」、小林・益川両氏がパネル討論「宇宙人と人間」【化学賞】3月24日開催：ボストン大学名誉教授・下村脩・同特別招へい教授 「天の導くままにー発光生物と半世紀」、下村氏、磯部稔・本学名誉教授がパネル討論「光の魅力、探究する喜び」	2.10 (火)	朝日 (朝刊)
70 がん最前線：医学部附属病院や愛知県がんセンター中央病院で行った軟部肉腫の治療成績は、5年生存率が84%、5年局所制御率は88%	2.10 (火)	読売
71 名大サロンの主役：井口治夫・環境学研究科教授 オバマ氏、経済対策が鍵	2.10 (火)	中日 (朝刊)
72 わくわくサイエンスレポート：近藤滋・理学研究科教授が生き物の模様の謎について解説	2.10 (火)	中日 (夕刊)
73 国際シンポジウム「健康影響評価とエコトピア指標の構築」14日開催：松井恒雄・工学研究科教授、片山新太・エコトピア科学研究所教授、林 希一郎・同研究所教授、古賀一男・同研究所教授、田原謙・同研究所教授らが講演	2.11 (水) 2.12 (木)	朝日 (朝刊)
74 クリック Opinion：和田肇・法学研究科教授は雇用危機について「労働力である人間を大切に雇用モデルの再構築が必要で、不安定な雇用に安易に依拠するシステムを変更すべき時にきている」と話す また後 房雄・同研究科教授は「NPO 活動について「介護 NPO のように他の分野で社会的存在意義を示すことができるかどうか重要」と話す	2.12 (木)	毎日 (朝刊)
75 山口靖・環境学研究科教授や京都大学などの研究グループは、宇宙航空研究開発機構の月周回衛星「かぐや」を使い、月の地下構造の観測に成功	2.13 (金)	朝日 (朝刊) 他3社
76 東海バイオマスフェア19、20日開催：福島和彦・生命農学研究科教授 「持続的社会におけるバイオマス利活用の役割」など	2.13 (金)	日経 (朝刊)
77 「働くシニアの健康管理」3月11日開催：加藤利章・医学部附属病院医員が講師	2.13 (金)	中日 (朝刊)
78 暮らしの告知板：福井康雄・理学研究科教授 「宇宙の不思議に答えます」	2.14 (土)	朝日 (朝刊)
79 本学で留学生対象に行われた読売新聞特別講座の後期終了	2.14 (土)	読売
80 理系白書'09挑戦のとき：山口茂弘・理学研究科教授 分子創出の魅力説く	2.15 (日)	毎日 (朝刊)
81 京都産業大学教授・益川敏英・本学特別招へい教授が京都市から名誉市民の称号を授与される	2.15 (日)	中日 (朝刊)

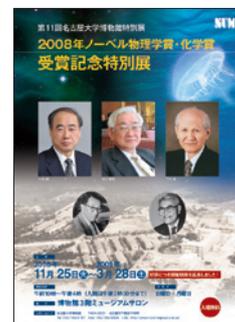
開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月25日(火)～3月28日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入場無料

第11回名古屋大学博物館特別展
「2008年ノーベル物理学賞・化学賞受賞記念特別展」



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

3月24日(火)

場 所：生命農学研究科 B棟319号室
時 間：1. 15:00-16:30 (予定)
2. 16:30-18:00 (予定)
入場無料

2008年度第8回オープンセミナー

テ ー マ：1. 未定
2. アフリカ農業・農村開発のための実践的戦略の構築に関する研究 (仮)
講 演 者：1. Prof. Esther Murugi Kahangi (Deputy Vice Chancellor, Research, Production & Extension, Jomo Kenyatta University of Agriculture and Technology)
2. 櫻井武司 (農学国際教育協力研究センター客員教授)

[問い合わせ先]

農学国際教育協力研究センター
榎原大悟准教授 052-789-4226
E-mail: makihara@agr.nagoya-u.ac.jp

3月24日(火)～7月25日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入場無料

第12回名古屋大学博物館特別展
「大陸アフリカ～名大研究の軌跡」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

3月25日(水)

場 所：豊田講堂
時 間：大学院10:00～、学部12:00～

卒業式

[問い合わせ先]

学務部学務企画課 052-789-2159

3月26日(木)

場 所：工学研究科創造工学センター
時 間：10:00～16:30
募集人数：10名
対 象：中学3年以上
参 加 費：300円 (傷害保険料を含む)
※要事前申込

第7回モノづくり市民公開講座
「夢工作」スターリングエンジン



[問い合わせ先]

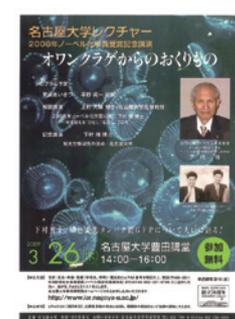
工学研究科創造工学センター
モノづくり市民公開講座 052-789-3788

3月26日(木)

場 所：豊田講堂
時 間：14:00～16:00
参加無料
※事前申込は終了しています
(同時中継を行うサテライト会場への
入場は予約不要、先着300名)

名古屋大学レクチャー
2008年ノーベル化学賞受賞記念講演

講演内容：1. 2008年ノーベル化学賞に輝く下村 脩博士
一時を超える「ひと」、「もの」、「ところ」 -
2. 発光生物研究の原点-名古屋大学
講 演 者：1. 上村大輔 (本学名誉教授)
2. 下村 脩
(特別招へい教授、
ウッズホール海洋生物学研究所特別上席研究員)



[問い合わせ先]

高等研究院 052-788-6153
Fax: 052-788-6151
E-mail: iar@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月27日(金)

場 所：野依記念学術交流館 2階
時 間：18:00~20:00
定 員：100名（登録制・先着順受付）
入場無料
※faxまたはメールにてお申し込みください。

第9回名大 ERC・キタン会名古屋ビジネスセミナー

講演内容：「これからの中国とインドを読み解く」
講 演 者：谷野作太郎（日中友好会館副会長）



[問い合わせ先]
経済学研究科附属
国際経済政策研究センター
052-789-4941

4月4日(土)

場 所：博物館野外観察園
時 間：13:00~15:00
参加無料
※要事前申込

野外観察園見学会

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

4月5日(日)

場 所：豊田講堂
時 間：大学院 10:00~10:50、
学 部 11:15~12:10

入学式

[問い合わせ先]
学務部学務企画課 052-789-2159

4月10日(金)

場 所：博物館講義室
時 間：13:30~15:00
入場無料

第95回名古屋大学博物館特別講演会

講演題目：「名古屋大学の第1回アフリカ調査（1962年）の思い出」
講 演 者：諏訪兼位（本学名誉教授）

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

4月11日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：14:00~15:00
入場無料

第26回博物館コンサート (NUMCo) 「魅惑のシャンソン」

歌 手：山本雅世（本学 OG）

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

4月14日(火)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：13:30~18:00
※要事前申込
ご氏名、ご所属、email アドレス、シンポジウムと意見交換会（会員無料、非会員及び学生は2,000円）への参加の有無を明記の上、fax、email または電話にてお申し込みください。

名古屋大学協会 4周年記念シンポジウム 「ナノカーボン 材料開発とその応用」



[問い合わせ先]
名古屋大学協会事務局
電話・fax：052-744-1987
E-mail：nano@sangaku.nagoya-u.ac.jp



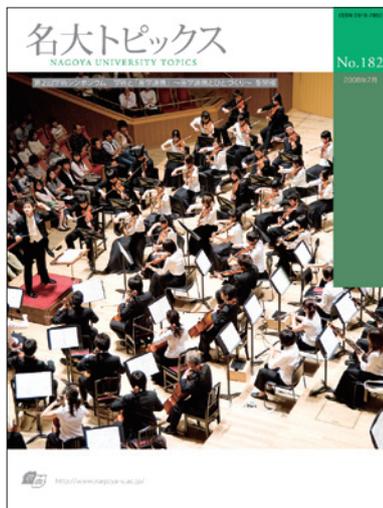
179号（2008年4月）名古屋大学応援団



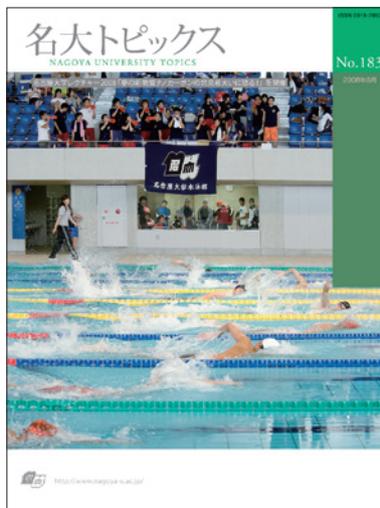
180号（2008年5月）航空部



181号（2008年6月）フォルクローレ同好会



182号（2008年7月）名古屋大学交響楽団



183号（2008年8月）水泳部



184号（2008年9月）美術部



185号（2008年10月）芸音学部



186号（2008年11月）男子ラクロス部



187号（2008年12月）民族舞踊団音舞



188号（2009年1月）居合道部



189号（2009年2月）フィギュアスケート部



190号（2009年3月）軽音楽部

名大トピックス No.190 平成21年3月16日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
 (<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

名古屋市青少年文化センターで行われた定期演奏会の様子（軽音楽部）
 （平成21年1月17日）



83 名古屋大学の「創基」138周年

名古屋大学は、1939(昭和14)年に名古屋帝国大学として創立され、今年で70周年をむかえます。10月17日に関係者による記念式典が、24日には市民にも開かれたホームカミングデイが行われる予定です。

ところで今回、創立70周年とともに、「創基138周年」という言葉が添えられるようになったことが目を引きます。これは、創立70周年記念行事委員会で検討され、学内で正式に承認されたものです。

この「創基」という言葉は、大学なら大学と名乗る以前の前身学校の歴史を包括する概念として、すでに使っている学校もあります。北海道大学なら1876年の札幌農学校から創基133年、筑波大学なら1872年の師範学校から創基137年といったぐあいです。

名大は、医学部の前身をたどっていくと、1871(明治4)年の名古屋県仮病院・仮医学校にまでさかのぼることができます。そこから創基138年というわけです。そのほかにも、下の図のように、旧教養部の前身として第八高等学校

が、経済学部の前身として名古屋高等商業学校が、名帝大創立前からありました。

もっとも名大では、これまでもこうした創立以前の歴史を大事にしてきました。それは、『名古屋大学五十年史』通史一(1995年刊)の全ページの実に約半分が、名帝大創立以前の「前史」に割かれていることでも分かります。この「創基」は、こうした考え方をより明確にする言葉ともいえるでしょう。

現在、記念式典での配布を期して、創立70周年記念図録の編さんが大学文書資料室を中心に進められています。また博物館では、名大史の常設展コーナーを記念式典の日にオープンする予定で、大学文書資料室もこれに参画しています。

については、名大の歴史にまつわる資料や写真、物品等をお持ちの方がおられましたら、まずはぜひ大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)までご一報ください。

